

## [研究ノート]

## “セ・ラ・フロンス : C'est la France.”

藤 田 秀

【MENU】 男と女の物語：ショパンとジョルジュ・ソンドのばあい  
(フランス風オシャベリ)

- § Aperitif (食前酒)
- § Hors-d'oeuvre (オードブル)
- § Plat principal 1 (主菜1)
- § Sorbets (シャーベット) (お口直し)
- § Plat principal 2 (主菜2)
- § Fromage (チーズ)
- § Gateau (ガト；ケーキ)

追 記

## § Aperitif (食前酒)

年寄りが集まると、いつも三つの話になる。1) 旅行の話。「このあいだ、どこそこへ行ってきました」と言って人の気を引く。2) 孫の話。「マスマス手に負えません」と言いながら内心ホクホクする。3) 病気の話。「どうも具合が悪い」と言って同情を引こうとする。かくいう筆者も年寄りだから、もちろん例外ではない。それで、ここでの話は1)、つまり「最近フランスへ行ってきました」というだけのことである。ではまずアメリカ式に結論から：

「結論」：フランスでは女は男に愛され、そして棄てられる。フランスでは男は女を愛し、そしてノンダクレる。フランスでは、男に愛されなかったヒトは、男を愛してかかる。もちろん男はそのヒトを愛し、そして棄てる。結局さいごには、男も女もミンナ同じことをいう。「セ・ラ・ヴィ！（C'est la vie!：コレガ人生サ!）」……ソレデ？……

それで男は白ワインをあおる（年度内に飲み切れなければ、日本の商社が買ってゆく。心配ない!）……ソレデ女は？……女はレストランに、必ず二人だけで、昼食にゆく……ナンデ？……だって!「アタイが本当にお話のできるのはアンタなのよ!」と言わなくちゃ!……それで、29フラン99サンチームのプラ・ド・ジュール（日替わり定食）をワリカンで注文する……それで、12時からキツカリ14時まで、楽しいお食事!

「ペチャクチャ・ペチャクチャ・ノン?」・「プッ!」（否定の超短縮型）

「ペチャクチャ・ペチャクチャ・パ?」・「ー!」（肯定の超短縮型）

『黙って目をつぶり、肩を軽く・エレガントに・できるだけ可愛らしくすくめる』

かくて春には人生が始まり、秋のヴァコーンスの終わりとともにオワル。

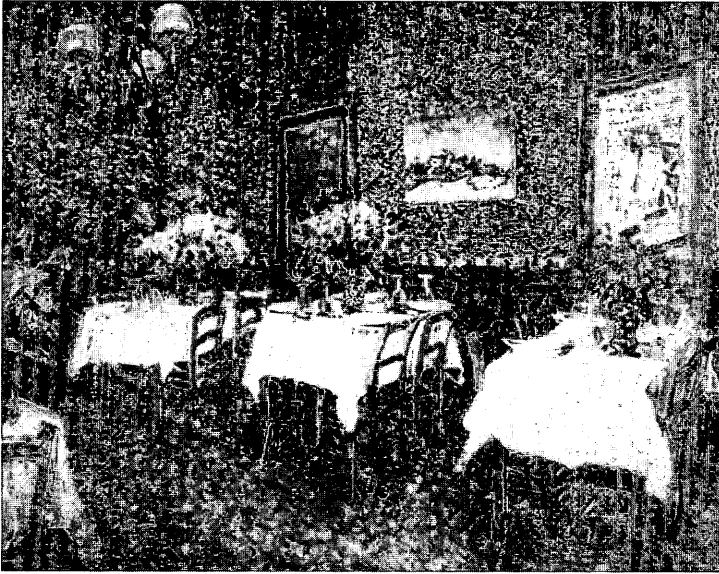


Fig. 1 “レストランの内部” ゴッホ，パリにて，1887年作

【驚くほどそっくりの店が今もザラにある。「高級レストラン」などではない。  
29フラン99サンチームの日替りランチが出る】

しかし春はまた来る！ 心配ない！

## § Hors-d'oeuvre（オードブル）

ショパンの前にショパンなく，ショパンのあとにショパンなし，といわれる。ショパンは誰のマネをしたのでもない。また，誰もショパンのマネはできない。かくて，美しくもまた悲しい孤高の思いを秘めたまま，200年が過ぎている。「天才だ。諸君，帽子を取りたまえ！」といって，20歳のショパンのデビューを飾ったのは，シューマンであったといわれる。この時，ショパンの人生の後半が始まった。20歳でデビューして，その後わずか19年でショパンは肺結核で血を吐きながら倒れる。



Fig. 2 1826年（16歳）のショパン  
ボズナンの貴族・ラジーヴィヴ大公邸サロンで、  
大公の次女ワンダの描いたスケッチ。  
彼女はショパンの2歳年下であるが、37歳で亡く  
なる。

ショパンはパリで亡くなった……パリで？……そう、このゴタゴタした汚い街で！誤解しないでほしい。ショパンの亡くなったのは1849年のことである。その後まもなく、「パリを美しい街にする」整備事業が始まった。ナポレオン三世の始めた事業で、これを「第二帝政時代（1852～1870年）」という。「第一帝政」とは言うまでもなく、「大ナポレオン時代」を指す。では、ナポレオン二世はいなかったのか？ もちろんいた。しかし、大ナポレオンの実の一人息子・ナポレオン二世は若死

にした。それで大ナポレオンの二人目の妃・ジョセフィーヌの「連れ子」に相続権が移った。ジョセフィーヌは気の強い美人で、（美人は皆、強気だ）大ナポレオンも彼女の前に出ると、「ジョセフィーヌよ！ 家に帰れば英雄はいないのだ！」と嘆いたという。そんなダラシのないカレを、ジョセフィーヌは5年で「棄てた」。

「第一帝政」は大ナポレオンの「ワータルローの敗北」で終わる。たちまち、フランス革命にたいする反動と仕返しが来た。ルイ18世の「王政復古・白色テロ・外国軍の占領時代」である。さらにシャルル10世の「王党派時代」が来て、合計15年の反動がフランスを覆う。しかし、ついにまた、その「仕返し・仕返し」が来た。「七月革命」である。これは1830年に起

きた。ところがこの間、ジョセフィーヌは「二人の連れ子」に「フランス革命の精神とナポレオン崇拜」を熱狂的に吹き込んでいた。別れてみたら、やっとナポレオンの偉大さがわかったのだろう（美人は皆、ソナナものだ）。ナポレオン三世の兄は1830年の革命戦争で戦病死した。それで、一人残った弟（ナポレオン三世）は、「伯父・大ナポレオンのあとをつぎ、偉大なフランスを再興する人物は自分の他にはいない！」と本気で信じ込んでいたというから、フランス女に見込まれると怖いことになる。

この1830年の「七月革命」に傍観的であった画家ドラクロワは、革命が勝利すると自分の臆病が恥ずかしくなった。それで、三色旗（tricoloreトリコロール）をかざして、今やまさにバリケードを飛び出して行くフランス女の絵を、デカデカと、一気に、年内に描き上げた。それだけではない。彼女につづく群衆の中に、ソッと自分の顔を描き込んだ（と言われている）。絵を描けば気持ちが治まってサッパリする（精神療法にも応用されている）。かくてドラクロワも、やっと自分のヒケメと憂さを洗い流した（と自分で言った）。

ところがなんと、それに“*La Liberte guidant le peuple* ; 民衆を導く自由の女神”などと大げさな題がつけられて、ルーブルに収まっている。「歴史家」というものが、いかにいいかげんな連中かよく分かる。さらに言っておけば、「自由の女神」がバストもあらわなトップレス姿になっているのは、画家の芸術精神が高ぶったためではない。バリケード戦は「奇跡の三日間」といわれ、この間に大勢の人が死んだ。続く2週間目の8月14日、シャルル10世の王政はついに転覆した（結構!）。だが、7月のパリなど暑くてかなわない。炎天下のバリケードならなおさらだ。東京のように蒸し暑くはないが、できれば（男たちがいなければ）下半身も脱ぎたかったに決まっている。彼女のかぶっている変な帽子は、40年前の大革命の時に民衆のかぶっていた、団結の象徴である「赤いフリジア帽」。ラ・マルセイエーズはもうできていたから、みんなが歌っていたはずである。



Fig. 3 ドラクローワによる“民衆を導く自由の女神”(1830年七月革命にて)

ちなみに、1792年4月、ストラスブールでマルセイエーズが作曲されるまでは、民衆も軍隊も、“アア・サイラ・サイラ！”(Sa ira, sa ira !; どうにかなるさ！[もちろん、ヒワイなイミもある])と歌っていた。だからバスチーユの襲撃にも、サイラ！で行ったはずである。アキレかえる楽観主義というべきで、ラテン系の血の入っていない、「ゲルマン・アングロサクソン」にはマネができません。「血なまぐさいマルセイエーズ」は、「500 m先の対岸は敵地」という緊迫したライン<sup>かはん</sup>河畔の街ストラスブールで、「ライン軍のための軍歌」として、一晩で熱狂的に作詞・作曲された。それを、チュルリー襲撃の時、マルセーユの義勇兵が歌いまくっていたので、一気にサイラに取って代わり全フランスに広まった。それで(アルザシアンにいたるまで)フランス人は、「三色旗・トリコロールと、国歌・マルセイエーズ」が好きである。

ここで付け加えておくと、マルセーユ義勇兵になるには三つの条件があっ

た：

- (1) 1790年7月（大革命）以降、国民軍に奉仕していた経験のあること
  - (2) 服役の経験を持たぬこと（監獄に入れられたことがない、というイミ、念のため）
  - (3) 負債がないこと
- である。

条件（1）により、軍隊に無経験で、無思想なナラズモノ、反革命分子は排除される。条件（2）についてはコメントの必要はないであろう。条件（3）により、金銭目当て・借金逃れは排除される。つまり「志の清いこと」を審査されたのである（今日の日本人に、このハードルがどの程度クリアできるのだろうか）。

募集目標は18～25歳男子600名。6月24日から28日までの4日間で516名が集まった。彼等は8中隊に分けられ、パリまで800キロの進軍中に歌詞を受けとり暗記した。マルセーユは地中海の港町で、イタリアにすぐ近い。それで彼等は、「地中海なまりのフランス語」で、しかもかなりの美声で、カンツォーネ張りに歌っていたのではなかったか？

ともあれ、ドラクロワが描こうとしたものは、「本当にあった姿」である。このように、「本当にあったこと・あることを描き切ろうとする精神」を、「フレンチ・リアリズム」という。これが「物理」の世界に持ち込まれると、「REALITY (Realite ; レアリテ・実在)」と呼ばれる概念となる。これは日本の職業物理屋・大学研究貴族には理解できない（あるいは理解したくない）概念である。彼等は、フィロソフィーが問題になると、（ドイツ観念論に爪の先まで汚染されているので）とたんに、ヒキツケたような拒絶反応を起こす（のが普通である）。だから、彼等の学生あるいは後輩たちは、問い詰められると、「習って来なかった！」と答えて平然としている（のが普通である）。なぜなら彼等の大学とは、「習う所（マネをする所）」であって、自分で勉強する所



Fig. 4 ショパンの父，1829年（58歳頃）の作。  
一家はすでにワルシャワに転出し、  
父親は教師、ショパンはワルシャ  
ワ音楽院4年生

ではないからである。

ショパンの幼・少年期は、ヨーロッパは動乱の時代であった（ヨーロッパはいっただってそうで、紛争のない時期の方がまれであるが）。ショパンの父はフランス人である。ドイツ領になったり、フランス領になったり、を繰り返してきた、ライン川沿いのアルザス州(La region d'Alsace)の名前は、どなたもご存じであろう。アルザスの西につづく州をロレーヌ(Lorraine)といい、ここもドイツ領のときはロートリンゲンと呼ばれていた。ロレーヌの中にヴォージュ県(Le département Vosge)というのがあり、アルザス州のすぐ西に接している。ショパンの父

はこの出身である。したがって彼は、相当な「アルザスなまりのフランス語」をしゃべっていたであろうと想像される。

ショパンの父は、「理由はまだ分からないが」、1787年、16歳のときポーランドに移住したという。「分からない」ということはあるまい。1789年がフランス大革命の年である。したがって、彼はフランスにいたくなかったか、いられなくなったか、のどちらかに決まっている。彼は「ヴォージュ県マランヴィーユのブドウ栽培と車大工にたずさわる家に生まれた」という。このあたり一帯はアルザス・ワインの生産で有名である。したがって、ブドウ栽培にたずさわる家というのは、「ごく普通の農家」ということである。もちろん、ブドウ栽培はブドウ畑です。だが問題は、ブドウ畑の持ち主は誰かである。



ブドウ畑は貴族（領主）か教会が持っている。フランスは（今も）農業国であって、工業国ではない。国土の80％は平原であり、それを6：4で畑と森林に分ける。森林はみな植林である。畑には麦をつくり、つづく山や丘の傾斜地ではブドウをつくる（昼・夜の温度差がブドウの甘みを増し、肥料も自然に流れ下るので便利だ）。フランス大革命前、ルイ14世の確立したアンシャン・レジーム（旧体制）当時のフランスでは、人口は3,000万人たらずであった。そのうち2,500万人が農民、200万人が勤労者、100万人が新興ブルジョワジー（有産階級：豊かな銀行家など）であった。これら合計約2,800万人は「第三身分」（le tiers etat）と呼ばれ、みな被支配階層である。

これに対する特権的支配階級は、貴族（領主）が40万人、僧侶（教会・僧院などを持つ）が10万人であった。この合計50万人の上に、国王とその家系が乗かって「王権国家」をなしていた。

僧侶と貴族たちは、「特権」として、上の国王に対して納めるべき税金が免除されていた。一方、彼等の下の「第三身分」に対しては、「農作物の徴収」から「水車・パン焼きかまど・ブドウ搾り器の使用料」にいたるまで、農民の日常生活のほとんど全てを支配する「経済的特権」を持っていた（もちろん王様は、これとは別に農民から直接徴収する）。僧侶・貴族は、この上に、「裁判権」などの「政治的特権」、「遊びと経済」の「狩猟権」さえ独占していた（農民は勝手に野兎も取れない）。かのモーツァルトの「フィガロの結婚」というオペラは、フランス領主（貴族）が家臣の結婚に対して、「初夜権」などというものまで持ち出すのを、カラカッタものである（という）。

非常に大まかにいうと、アンシャン・レジーム下では、畑に20束の麦の収穫があると、農民の手元に残るのは僅か2束であったという。残りはみな、王様・僧院・教会・領主・貴族の館に持って行かれてしまう。したがって、もし農民が「自分の収入を増やして、せめて4束の麦が欲しいものだ！」と

思えば、同じ畑から彼は40束の麦をつくり出すほかはなかった。そんなことが可能か？　このような労働条件下で、人は生産意欲を持ち得るか？

こんな時代に、ショパンの父が、「フランスにはいられない。いたくない」と思った理由とは、どんな理由であったのだろうか？　断っておくが、彼はまだ16歳という、多感な青年であった。あとで分かるように、彼は「読み書きのできる」青年であって、単なるブドウ畑の肉体労働者ではなかった。ついでながら、彼の家が「車大工にたずさわる家」というのは「誤訳」であろう。アルザス・ロレーヌには川が多い。車とは「麦の粉ひき」に使う水車のことであろう。知っての通り、北フランスなど、風の強いところでは風車を使って粉をひく。ゴッホの絵にもあるように、1886年のパリにも風車小屋があった。したがって、ショパンの父は、「水車小屋のムニエ（粉ひき）」とも関係があったとしておこう。

ショパンの父がフランスを去った理由を「政治」にもとめれば、まさに1787年2月は「貴族の革命」の年であった。アンシャン・レジーム最後の予算では、歳出6億リーブルに対して、歳入が5億しかなかった。しかも、積み上がった「赤字公債」は累計50億に達していた。その公債の利子だけで、6億の予算の内、じつに3億が金貸し貴族・新興ブルジョワジー・銀行家に持って行かれてしまう。これは「王室の破産」である（日本では赤字国債の利子・20%）。このため国王は貴族の「免税特権」を廃止して、税金を取り立てようとした。これに対し、領主・反動貴族たちは「名士会」をつくり、「反王権運動」を公然と開始した。

これが「フランス大革命」の直接のキッカケである（といわれることもある）。しかし運動の主体は「領主・反動貴族」であるから、その意図・意識・態度が「民主的」であろうはずがない。逆に、自分たちの領内での反動的シメツケを、「王様よりオレの方が偉い」と言って）いっそう強化したのである。そ

れに逆らったショパンの父が、「政治的に追われた」としても、それほど不思議なことではあるまい。彼の家は「水車小屋とブドウ園の管理人だった」とすれば、これは農民層の「中間管理職」である。この層が一番先に危機を悟る。彼はまさに16歳。政治的にも血氣さかんな青年であったかも知れない。

ショパンの父がフランスを去った理由を、「個人的恋愛事件（ラブ・アフェア）」にもとめるのもおかしくはあるまい。彼は16歳の青年。しかも肖像画によれば、そんなにブサイクではない。その他に（日本人がよく見落とすことであるが）「同性愛」ということもあり得る。数だけで言えば、同性の数は異性の数と等しいからである。だがこれは「宗教問題」になる。フランスは伝統的なカソリックの国で、「カソリックの長女」と言われてきた国柄である。ショパンの父が、何らかの理由で、コチンコチンのフランス・カソリック社会から、「宗教的に追われた」ということがあったとしても、それほど不思議なことではあるまい。彼はまだ16歳。情緒的にもナイーブな、美青年であったかも知れない。女が美人に生まれついた災難は、「イケスカナイ男たち」に次々に言い寄られることであるという。美少年に生まれついた災難も同様であり得る。

悪いことに（あるいはいいことに）同性愛者は普通の人よりも、「独特な感性が鋭く、感情が細やかである」というのが、今でも、フランスの芸術家の通り相場になっている。その理由は、おそらく、厳しい「カソリックの宗教支配」の下で、非常に緊迫した、秘めやかな日々を過ごさなければならないからであろう。フランスの17～18世紀の僧院には（尼院ではない）、申し合わせたように、沢山の「魔除け」が屋根の上、壁の角などに取り付けてある。それらは実にグロテスクな姿・顔型をしている。その目的は、僧院の外から（夜になると）襲いかかってくる「悪魔」を追い払うためである。それらの中には、思わず顔をそむけたくなるような、露骨な同性愛の性行為を示すもの

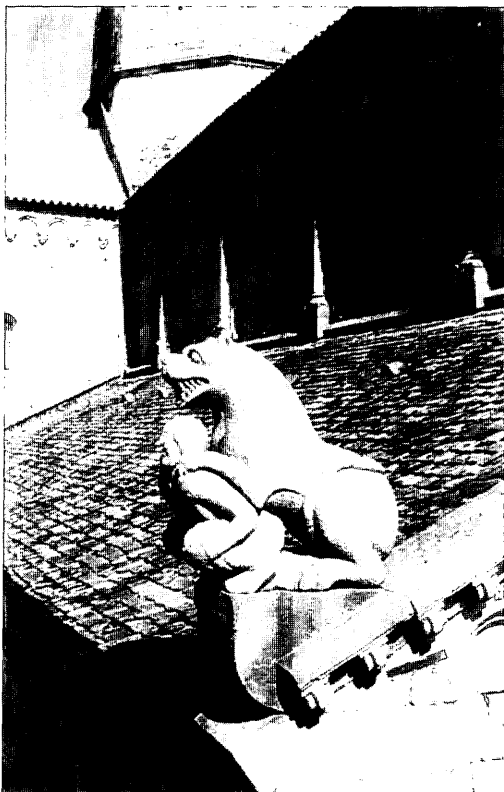


Fig. 5 ロスハイムの『ローマの道』にある、サンピエール・サンポール教会のライオンと人間。この教会には、12～19世紀にかけて、いろいろの部分に修理・補修が加えられているために、いろいろの年代のものが混在している。

もマレではない。

だがプラトニック・ラブがあり得るように、彼等の間にもストイックな場合もあり得るのであろう。そうでなければ、「フランスの裏側」が、あれほど公然たる評価を下すこともなかろう。プロテスタントの国アメリカでも、軍隊内に同性愛を認めると決めた。これに抗議した將軍たちが、続々とクリントンに辞表を叩き付ける騒ぎとなった。「同性愛者は敵を憎む心が弱く、イザというときに敵を殺せない」というのが、將軍たちの（表向きの）言い分である（いかにもアメリカ的だ）。無宗教な日本人には、彼等の「性生活」だけを勝手に夢想するばかりで、「精神面は全

く理解できない」と言うべきであろう。

では、フランスの（高級な同性愛の）例をあげろと言われれば、かの「サルトルとボーボワール・コンビ」の一方の、「ボーボワールと女子高生のばあい」がある。だが、それで彼女の評価がいつそう高まったという話も知らないし、面目を失墜したという話も聞かない。（サルトルもボーボワールも、晩

年には相前後してアル中になったという話題の方が、イタマシクもまたナサケナイ気がする。) 古い話題なら、詩人「ベルレーヌとランボーのばあい」が有名である。ランボーの詩才の前に、ついに詩聖ベルレーヌがひざまずいて、カレの愛情をもとめた。分裂気質で尊大な「天才詩人ランボー」は、ついに「ボクなしに、キミが幸せになど暮らせるものか！ アア！ そんなことが君にできるものか！」とまで言い放った。かくて「ランボーの詩才」に憧れたベルレーヌの畏怖は、ついに嫉妬と燃え上がり、「報われぬ愛」に泣いてラム酒に溺れ、アル中から人格破綻へと転落する。

ブラッセルを「二人で旅行中」のある日、ベルレーヌは50発の弾丸とピストルを、23フランで買った。その日の午後2時、例によって「報われない愛」に泥酔したベルレーヌは、3mの距離からランボーめがけて、ついに3発を発射！（コワイ・コワイ！）その内の1発がランボーの左手首に当たる。それで何を悟ったのか、ランボーはプツツリと詩を捨て、生涯にわたるデタラメな世界放浪の旅を始める。一方のベルレーヌは、獄中で、まるで人が変わったようにヒソソリと、囚人たちにフランス語を教えながら一生を終わる。

ショパンの父は、のちに一度ウィーンまで来ながら、ついにフランスには生涯戻らなかった。何故か？ これまでの仮説を認めれば簡単である。彼にはロレーヌ州が通れない。500 mのライン河を渡り、ストラスブールからアルザス・ロレーヌに入り、ノンシー（Nancy）を抜けなければ、パリに行く道はない。政治的理由なら時代は変わった。ご領主様の求愛をハネツケタからというなら、もう彼の方で忘れたがっているだろう。だが「魂を悪魔に売った者」と宣告した教会勢力は厳存している！ アルザス・ロレーヌを一泊もせずに通過することはできない。そして一か所にでも泊まれば、たちまち教会の網の目に掛かる。

フランス滞在中に「元ロシヤ・ノーメンクラトゥーラ（超特権・支配階級）のダラク分子」と、ショパンについて雑談する機会があった。彼は大げさに、「オー！ オー！ ショパンはポーランドの国民的英雄だ」と始めた。だが、ショパンがパリで死に、葬儀もパリで行い、墓さえもパリにあると聞くと、言い知れぬ当惑が彼の顔にあふれた。ショパンの作品や、彼と同棲した女・ジョルジュ・ソンドについて「評価・解釈」を下すことならば、彼は山のような知識をひけらかして来たに違いない。「ノーメンクラトゥーラのダラク分子」というのは、「中央の物理学研究所長」などを（要領よく）タライマワシに歩き回って来た、高級知識人・党役員を指す。彼等には「政治的特権」は何もなかった。ただ高給をもらい、「社会主義国家での優雅な生活」を送って来ただけの連中である。

彼等、有名知識人の実体は、社会主義官僚体制が、永い年月をかけて建造してきた「海外向け広告塔」に過ぎない。オリンピック・メダリスト、芸術家（音楽家）、ノーベル賞受賞物理学者などは、その広告塔のテッペンをかざるキラキラ星である。彼等は「世襲制度」まで確立していた。彼等の「新しい任務」の一つは、西欧の国際会議に（自由に）出席し、組織委員会・プログラミングメンバーなどに食い込むことである。学会会場では座長になり、さりげなく・愛想よく、「新国家の宣伝に努めること」である。

彼等の内に秘めた個人的願望は、この間に、西側に信頼できる知人をつくり、最後には（たとえばフランス経由で）円満にアメリカに移住することである。「エリツインがわれわれの年金を半分にカットした」ので、老後の夢（クリミアに別荘を持つこと）がフツ飛んだ。もちろん、「社会主義流通機構」の「闇組織」を独占して来た勢力は、今なお健在である。だが、それと闘うことなど無意味である。彼は言った；「われわれは無力だ。だがモスクワは離れたくない。地方で泥にまみれてアガイテみても、一かけらのジャガイモさえ、農民に取り返すこともできぬまま、われわれは死に、朽ち果てるだろ

う！」

ショパンについての知識と教養を深めるのが、彼の「趣味」であったなら、彼にはタツプリの時間と経済的余裕があったはずである。彼の唯一のエラーは、「ショパンはパリで死んだ」という、この簡単明瞭な「事実」を、ついに「習って来なかった」ことだ！ ナイーブで・図々しく・かつまた厚かましい・彼の「ロシヤ人の心」の中には、すでに天にも届くほど高く、ウソッパチのガラクタが詰まっていた。その、「ストラスブールのカテドラル」にも似た大建造物は、一瞬にして、ガラガラと大音響をあげながら倒壊した！

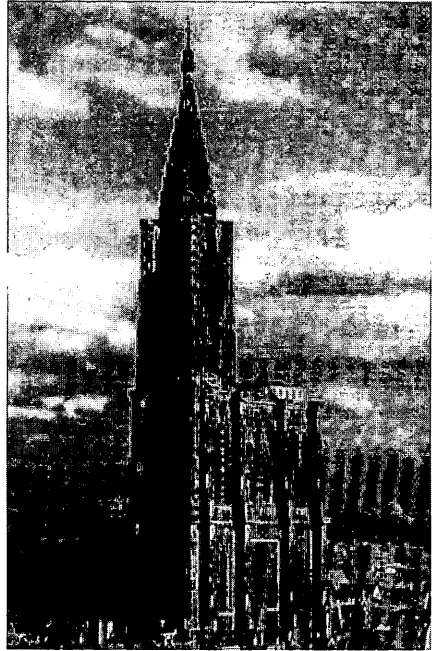


Fig. 6 ストラスブールのカテドラル

「ザマー見ヤガレ！……」……筆者はひとり心中深く叫んだ…….

ショパンの父は、何故ポーランドまでも（逃げて）来たのか？ 何故ポーランドでなければならなかったのか？ それは分かる。彼はロレーヌの人である。彼は、フランス語・アルザス語・ドイツ語を毎日使って暮らしていた。そんな彼にとって、ドイツ語圏は「まだ安全ではない」。何を話しているのか分からない「ポーランド語」の会話を耳にしたとき、「やっと遠くへ来た！ これで安心だ！」と思ったに違いない。もちろん疑問は残る。おそらくショパンの父は、単身でこんな大旅行をしたのではあるまい。集団でか、誰かに引率されてか？ とにかく「フランスには帰れない」理由を背負って

の旅行であった。彼は「どこの馬の骨とも分からぬ避難民」ではなかった。最初は「タバコ工場」『農家の納屋程度であろう』で働いていた。やがて彼は「ショパンの生家」『門番か庭の手入れ職人の家であろう』を邸内に持つ貴族（世襲領主）に雇われ、そこで住込みの「フランス語の家庭教師」となる。さらに、そこに「領主夫人の侍女」として入ってきた女性と結婚する。彼女は、「貴族あるいは豪農の娘らしい」ということに仕立て上げてある。ショパンが生れた1810年、一家はワルシャワに出て、父は高校のフランス文学教師になった。

アルザス・ロレーヌの人たちは、「オレたちはアルザシアン・ロレーニアンであって、ドイツ人でもフランス人でもないんだ！」という、「誇り」の中に毎日生きている。これは年寄りばかりとは限らない。ウラ若き女性（26歳くらいとしようか）でさえもそうだ：

“Parce que vous etes Alsacienne!”

「なんてったって、アンタはアルザシエヌだからな！」と言ってやると、彼女は椅子から飛び上がらんばかりに喜んで、“ウエ・ウエ！（ウイ・ウイ）”とアルザスなまりで叫んだ。アメリカ人が、“Goddamn-it ガッデミ（あのヤロウ）、dumb-thing ダムシン（ロクデナシ）、Nuts ナッツ（クソッたれ）”と言わずには、一日も暮らせないと同じように、彼等は、ふたこと目にはこう言いながら毎日暮らしている：

“Est barbares! エスト・バルバール!”（東の野蛮人!：ドイツ人のこと）

“Ouest barbares! ウエスト・バルバール!”（西の野蛮人!：フランス人のこと）

彼等は信じている：「ヨーロッパ大陸に人類が最初に住み始めて以来この



かた、ライン河とヴォージュ山脈に挟まれている、このアルザスの平野だけが、いつもヨーロッパの中心であり続けてきた。その証拠には、今日でも、EU議会の会場はストラスブール・アルザッスにあるではないか！」(N'est-ce pas ?)

したがってショパンの父は、どうしても、「ヤバン人の住むドイツ」は通過しなければならなかったのである。もちろんパリになど行く必要はない。あんな所は、ただ

「西のヤバン人」どもが、「ロアールなまりのフランス語」で、キャンキャン・クワンクワンとヤカマしくシャベクリまくっているだけのところだからである。

## § Plat principal 1 (主菜1)

ショパンがパリに出て来たのは1831年で、彼は22歳の独身であった。パリは政治的混乱の真っ最中にあった。前記した、ドラクロワの1830年の七月革命は、バリケードで奪取したものを、たちまち議会で失っていた。ショパンがフランスで過ごした1831～1849の18年間は、フランス政治史の中でもきわめて不安定・デリケートな時期の一つである。



Fig. 7 アルザスのフォークダンス

ショパンの父が、フランスを出たのとほとんど同時に、反動貴族の「反王権運動」が表面化したことはすでに述べた。スローガンは「課税反対」である。領主・貴族が騒ぐだけなら、王様も困らなかったろう。貴族連中は、もともと「免税」されていたのだから、「新しい財源が手に入らない」というだけである。だがこの「反王権運動」に、第三身分最上層の「新興ブルジョワジー（金持ち・有産階級・銀行家）」が合流したから騒ぎは大きくなった。貴族とブルジョワジーは、すぐに、お互いの利害が一致しているのを見た。

封建貴族・反動領主から見れば、王様など特別な存在ではない。中世以来の領主たちは、麦の収穫期になるたびに、「略奪・婦女暴行・虐殺が楽しみで」戦争を起こしてきた。『自分たちでそう言ってます』その中で、多少人より力があり、頭の良かった奴がノシ上がって「国王」になり「国家主義」を唱えた。それが今では「絶対君主」だの、「神権」だのと、自分勝手な「存在理由」を並べ立てているにすぎないからである。

他方のブルジョワジーから見れば、「王室破産」の原因は、国王先頭の度はずれた「美食と乱痴気な生き方（いずれ後述します）」そのものにある。それに加えて、よせばいいのに、「アメリカ独立戦争」などに、イギリスの向こうを張って戦費を注ぎ込み、最後には、連戦連敗のワシントン将軍に援軍を送ったりしたからだ。その、勝手な出費のツケを、「第三身分だけに」税金として押しつけてくるのは不合理だ。それでまず、「課税の平等」というスローガンを発明した。すぐにこれを抽象化して“Egalite: エガリテ（平等）”と言った。

貴族とブルジョワジーによる、政治的集中攻撃を受けた国王は、武力で簡単に蹴散らせると考え、軍隊を繰り出した。新興ブルジョワジー（銀行家）の中に、頭の良いのがいた。彼は「第三身分」というズサンな定義の中には、「自分たち・有産階級」の他にも、「200万人の勤労者階級（市民：シトワイアン）」が含まれていることに気がついた。それで、国王の圧制からの「自



Fig. 8 ヴェルミーの丘のフランス義勇軍

由：Liberte リベルテ」というスローガンを発明し、「三部会」の開催を請求した。「オレたちも三部会のメンバーらしいゾ」と錯覚した市民階級は、面倒な会議を避けて（彼等の大半は字が読めない）、街頭での直接行動に出て、軍隊と衝突し、チュルリーをめぐる市街戦が始まった。

「フランス国王が危ない」と知ったオーストリアとプロイセンの国王は、放っておけば、これまで築き上げてきた「結婚政策によるヨーロッパ支配機構の危機」が来ると悟った。直ちに、フランス国王援助の軍隊が送り出された。中でも、フランス革命を最も深く憎んでいたプロイセンのブラウンシュヴァイクは、「パリなど、隅から隅までブチ壊してやる！」と豪語し、出兵後わずか20日間でヨーロッパを横断し、1791年9月2日には、パリまで僅か220キロのベルダンを占領した。強いはずのフランス正規軍は、長年の王政下で腐敗・墮落していた。それに加えて、士官級を占める貴族の子弟が大量

に国外に逃亡し、内部崩壊を起こして連戦連敗した。

「パリ生活の危機が来る」（占領されれば、略奪・婦女暴行・虐殺を受ける）と誰もが直感した。「武闘派のジロンド党」が、この挑戦を受けて立った（ということになっている）。パリ市街戦を経験した連中を集めて、にわかづくりの軍隊を送り出した。しかしやはり連敗する。「革命とパリの生活を、皆で守ろう」と宣伝し、「*Fraternite* ; フラテルニテ（博愛）」というスローガンを発明した。市民（シトワイアン）につづいて、「この辺で参加した方が得だ」と悟った農民も、田舎（カンパーニュ）からパリに集まり、義勇軍が送り出された。「ヴァルミーの丘」をめぐる死闘が続いた。そしてヨーロッパ中が驚いたことには、美しい制服を着飾った「世界最強」のプロイセン・オーストリアの連合軍が、ボロ服をまとい「フリジア帽」をかぶった、フランス義勇軍の前に破れ去った！ この時、かのゲーテも参戦していた。彼は敗走するプロイセン軍の陣中で、「この時から世界史の新しい時代が始まる」と言った（という）。

1789年7月14日のバスティーユ襲撃から、1796年にナポレオンがイタリア方面軍司令官として出撃してゆくまで、僅か7年であった。この7年間のフランス社会の激動を、フランス外部のヨーロッパ社会もモロに受けていた。この時ショパンの父はまだ23歳であった。ショパンは、さらに10年後に生まれる。ショパンが生まれるまでのこの10年間に、ヨーロッパの「社会と秩序」は、フランスによって、破滅的とも言えるほどの激変を被った。これは「ご近所迷惑」とも言える。フランス人特有のパッションが、ヨーロッパ中を勝手に吹きまくっていったのである。これを「時代精神」と表現したのはヘーゲルであるという。フランスに対する「スキ・キライ」は、この辺から分かれ始める。

現在のヨーロッパ社会が持つ「歴史の連続感覚」は、ここに原点を持つ。

この連続感覚は、二つの大戦を経ながらも、今もなお続いている。「アジア的連続感覚」（あるいは「アジア的停滞」）とは全く異質な、このヨーロッパの「歴史観」を「思い知る」ことが、「歴史的断絶」の中に「平然と暮らしている」われわれにとって重要である。

1792年のヴァルミーの勝利から、1810年のショパン誕生までの約20年間のフランスの政治史は、約10年間の「大革命の後半史」と、これに続く約10年間の「ナポレオン戦争の前半史」と要約できよう。フランス人は、これを1815年のナポレオンの敗北までにまとめて、「革命戦争の23年間」と認識するであろう。この23年間、フランス革命政府は、国内の反動勢力も含めて、ほとんど全ヨーロッパを相手に戦争をしてきた……何のために？

その後1817年、パリは報復を受けた。プロイセンの砲撃をうけ街は炎上し、さらに、40日間の連続包囲・封鎖を受けた。抵抗したパリ市民は、ネズミのミートパイまでを食べつくし、飢餓・衰弱の果てに敗北・虐殺された。……何故か？……

1792～1815の23年間は、ヨーロッパにおける「近代・市民国家成立のための歴史の序章」であった。不幸にして、それを経験せずに今日に至っている二大先進国家（ドイツと日本）が、一貫してその後の西欧世界の問題児となってきた……というのが「フランス人の常識」である。彼等のいう「市民国家」とは、市民が政府職員を選ぶだけでなく、市民が予算を立て、市民が税制を決め、市民が参戦を決め、負ければ市民が賠償金を負担する国家だという。これを聞けば、フランス人が「フランス以外のもの」を「スネパ・フロンセ！ “Ce n'est pas Francais!”」と言って、軽蔑・あるいは排斥する根拠が理解できよう。われらのショパンの人生環境を知るために、その歴史を駆け足で眺めれば次のように言えるだろう：

1792年9月20日、「ヴァルミーの丘」の戦いで奇跡的に勝利し、一息ついた革命政府は、その年の12月には国王ルイ16世の「国王裁判」を始めた。ハプスブルグ家の血を引く王妃マリー・アントワネットが、「フランス軍がオーストリアに負ければ、自分たちは救われる」と言って国王を焚きつけた。国王はこれに同意して、オーストリアに派兵をもとめた。オーストリアにしてみれば、「国王がもとめたから行ってやったのだ」ということになる。これは許せない「反フランス的行為である」というのが、裁判の理由である。

すぐさま、イギリスは「対仏大同盟」をつくり、フランスに対する経済封鎖で牽制にでた。ご承知、イギリスには多数の貴族の子弟・子女が逃げてきている。ここは国王支持の態度を明確に示し、彼等を味方につけて、将来のフランス・コントロールのテコにするのが、イギリスのためである。対するフランス革命政府は、翌1793年1月20日に、国王ルイ16世をギロチンにかけて、この挑戦に応じた。フランス革命政府の態度硬化に脅威を感じたイギリスは、同年8月10日、地中海にネルソン率いる海軍を送り込み、植民地インドルートの確保にでた。産業革命の主力・綿製品の原料を確保しなければならないからである。ネルソンは、フランスの港ツーロンを占領し、フランス海軍を完全に閉じ込めた。

当時「小伍長」と呼ばれていたナポレオンが自分の砲兵隊を指揮し、12月19日にツーロンを取り返し、イギリス軍を海に追い払った。それ以来、「砲術の天才」としてのナポレオン・ボナパルトの名前が、パリで語られるようになった。

しかしパリでは、やがて革命が反動化し、ついに指導者ロベスピエールをギロチンにかけろ騒ぎとなった。わが国の教育では、「これは国民が長い間の恐怖政治に飽きたからである」という、イギリス式史観がまかり通っている。だが、実態はそんな「観念的なもの」ではない。

フランス国内では、すでに土地を得た中層以上の農民が保守化し、これ以上の改革をもとめなくなっていた。それは、土地を売却する際には、「一定面積以下に細分化した土地の売却を禁止する法案」が、議会を通過したことでも明確に見られる。これによって、経済力のない貧農には、解放される土地のリストを見せられても、事実上買いとることができなくなった（わが国の都市における「一戸建ての宅地分譲」が、いかに細分化しているかを知っている人には、すぐに分かるであろう）。他方では、全ヨーロッパ諸国の経済封鎖（貿易停止）を受けて、フランス国内の流通物資が不足し始めた。ことに日常食品価格のインフレにより、パリ市民の生活が困窮してきた。これらの危機を、「強力な物価統制」によって切り抜け、他方では、土地改革の恩恵をさらに下層農民にまで押し進めようとする「革命政府の恐怖政治」に対して、中農・商工業者がついに「革命に決別を告げた」のである。彼等は、高い小麦粉でつくったパンを、自由にパリで売らなくなったのである。かくしてフランス革命は、ロベスピエールの処刑によって、事実上中途半端に終わった。その影響は「今日まで及んでいる」と考えるのが、「フランス式思考」である。

かくて、政治家にとっては大変危険な、激動・反動の時期が来た。文化的反動も例外ではない。「どこに潜んで居たのだろう」と思われるような、アキレルばかりのデカダンな服装をした男女が、路地に溢れた。これに反発したサントワヌのサンキュロットと、ケンカ・こぜりあい絶えなかった。これはちょうど、第一次世界大戦のあとで、アメリカにエロ・グロ・ナンセンスが流行ったのと同様である。だがナポレオンは幸いにも、1796年3月2日「イタリア遠征軍最高司令官」に任命されてパリを離れていた。

それから僅か3年後の、1799年11月9日、ナポレオンはパリに呼び戻された。パリの政治は混乱の極にあった。あと一步というところで、「王政が合法的に復活するだろう」という瀬戸際になっていた。ナポレオンは議会に有

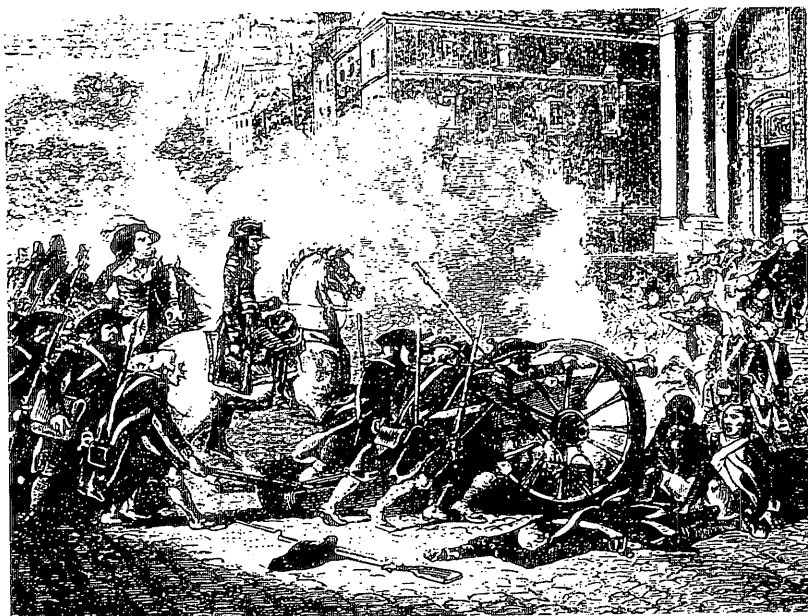


Fig. 9 ナポレオンによる「国民公会・王党派」の砲撃。1795年，ナポレオン26歳

名な質問をした。「フランス人が，フランス人を砲撃してもいいか？」というのである。許可を得たナポレオンの砲撃の前に，王党派は壊滅した。機を見るにさとい彼は，そのままクーデタを起こし執政になった。

ナポレオンの執政政府は5年間つづいた。1804年5月10日，ナポレオンは自分を皇帝に格上げした。この「第一帝政時代」は，ナポレオンがウオータールで敗北するまで，10年間つづく。ここでご注意申し上げておくが，この「帝政時代」でもフランスは依然として共和国であり，ウオータール敗北以後の，旧式な「王政時代」とは異なる。ナポレオンは「皇帝：ランペリュール」になったのであり，旧式な「国王：ロワ」になったのではない。しかし1815年には，ついに「本物の王政」が復活し，以後15年間の「報復の王政」が来た。



「第一帝政時代」の中間点、1810年にナポレオンはマリア・ルイザと結婚し、ポーランドでは、われわれのヒーローであるショパンが生まれた（ショパンの生誕は、1809年であるという説もある。つまり彼は、誕生日のハッキリ判るような「貴族の子」ではなかったのである）。ナポレオンとショパンの二人は、会ったこともなければ、おそらく、同時に同じ街にいたこともなかったであろう。しかしながら、二人とも、現代のわれわれに計り知れないほどの大きな文化遺産を残していった。

イタリア遠征軍最高司令官のナポレオンが、パリに戻り、クーデタを起こして執政となり、やがて「皇帝」になったことを、シーザーになぞらえて、彼の「個人的野心」と理解している人は多い。それは、わが国の「教育」が、ドイツの史観に汚染され切っているからである（ナポレオンが、自分勝手にパリに進軍したとでも思っているようだ）。当然この傾向は「優等生」ほど甚だしい。彼等の脳味噌には、このたぐいのガラクタが一杯に詰まっている。たとえば、かのベートーベンが交響曲「英雄」を作曲し、ナポレオンに捧げようとしたが、彼が皇帝になったと聞き、取り止めにしたなどというたぐいである。それらがいかに浅薄愚劣な理解であるか（いまはいちいち取り合っている暇がない）。

どこの国にも神話がある。アメリカの神話が、「メイフラワーに乗った清教徒たちが、プリモスの海岸に上陸して、最初に踏んだ石がこれだ」というのであれば、フランス共和国の神話は：

“Les trois ordres se réunissent alors sous le nom d'Assemblée nationale.”

「三つの階級は国民会議の名の下に結束した」というのが、神話の始まりである。事実、僧侶の大多数と、自由主義貴族とが「国民会議」に合流していった。国王も、残る貴族に対し、国民会議への参加を命令した。やがて、国民会議は「憲法制定国民会議」と改名し、1789年7月9日には、立憲君主制がおだやかにスタートするかに見えた。しかし、時はすでに遅かった。フ



Fig. 10 マダム・ボンパドウル

ランスの国民経済は、農村の農業も、都市の商工業も、すでに破産していた。それは、フランス・ブルボン王朝の栄華を築き上げた、「英明な太陽王・ルイ14世」自身の時代に、もう始まっていた。

彼の62年間にわたる治世の後半に、アンシャン・レジムが完成されると、すぐに農村の生産力は下降を始めた。後継のルイ15世はそれに気が付かなかった。一方、貴族たちはそれを知りながら、王朝内の権力争いにうつつを抜かして、「皆で赤ジウタンを踏み続けてい

た」。頭の悪いルイ15世には、ケネーが「経済表」を見せても、「かしこい女友だち・兼・情婦」であったマダム・ボンパドウルが意見をしても、すべては無駄であった。（その証拠には、マダム・ボンパドウルが亡くなると、ルイ15世は、誰もが呆れ返るほど悪趣味な、マダム・デュバリーを後釜に連れてきた！）ルイ16世とマリー・アントワネットは、たんに「運が悪かったにすぎない」とさえ言える（これが現実である）。

フランスの経済は、「重農主義による都市産業の軽視」と、商業のなまじな「自由貿易主義」とが裏目に出て、イギリスの商工業・産業革命に対し決定的に遅れた。パリには、「大量生産」に支えられたイギリス製品が流入し、地場産業が壊滅に追い込まれていった。1789年4月27日（バスチーユ襲撃の3

カ月前) サンタントワヌ通り (セヌ右岸・パリ第4区・バステュー角の貧民街) で、ついに小工業者の「賃下げ」をめぐる暴動が発生し、翌28日、軍隊が出動し発砲する騒ぎとなった。これが「プツン」であった。6月30日には、サンジェルマン・デプレ (セヌ左岸・パリ第6区・メトロ角) の修道院を群衆が襲った。ここには、「不服従」の罰を受けたフランス軍兵士がとらわれていた。パリには、暴動と無秩序とがすでに始まっていた (これが現実である)。

国王はフランス兵が頼りにならないので、外国人部隊 (主としてスイス兵) をパリに入れた。7月11日には群衆がパレ・ロワイヤール (王宮: セヌ右岸・パリ第1区・ルーブル隣り) を囲んだ。といっても誤解されては困る。国王は、たいていはベルサイユにいて、ここはほとんど留守である。しかしここでは、国王は2階しか使っていなかった。1階に続く広場はパリ市民に公開されていて (王宮の広場がですぞ)、夜になるとストリート・ガールが商売に集まる。以前、「ナポレオンを追って、パリに攻め込んだロシアのコサックが、パレ・ロワイヤールに現れた」と、トルストイの大作『戦争と平和』をオチョクツて、「教科書」に記述したことがあったが、誰にも分かってもらえなかった (これが現実である)。

神話のフィナーレはこうである: 1999年7月13日 (火) 夜9時半、あたりが暗くなり始めると、かねて用意していたロンポアン広場 (rond point: ロータリー) では、オーディオセットのスピーカーがガンガン鳴り出した。ビートルズのようなロックンロールのような、何とも言えぬ「中古品」といった感じの音楽である。これがアルザスのモダンシャンソンか、あるいは「カントリーフォーク」かと思ったが、さしあたり「ヌカミソの腐りそうな、ピクルス風・アルザス・ランド・ジャズ」と言っておこう。

音楽は筆者の滞在している11階 (dixieme: 10番目) のテラスの真下で鳴っ



Fig. 11 ストラスブールの「ロンポアン ; Rond Point (ロータリー)」

ている。「一晩中うるさいぞ」と脅かされていた。これが「革命記念日前夜祭」かと観念した。ついでながら、彼等は「革命記念日」とも「パリ祭」とも言わない。「7月14日 : quatorze Juillet : キャトールズ・ジュイエ」と言うだけである。アメリカ人が、独立記念日などと言わずに、“July the 4th”と言うのと同じである。やがて、暗い暗闇の空に、熱気球くらいの大きさに、フワッ・フワッと丸い花火が沢山あがり始めた。音は聞こえてこない。青・赤の単色の星が開くだけで、色は変化しない。きわめて素朴な打ち上げ花火である。おそらく、一発1万円もしないだろうと思った。それが、約2キロおきくらいに散在している、街あるいは村ごとに打ち上げているのが見える。一カ所から10発もあがると、それで終わりであった。ロンポアンのダンスパーティーも、ペアダンスはなく、ディスコ風に20人ほどが踊っていたが、夜中の2時になるとそれも終わりとなった。「パリの裏通りでは一晩中踊りで賑わう」なんて本当かね？ と思った（これが現実である）。

わが国でも「建国記念日には、各市町村は、朝は中央広場に国旗を高くか

かげ、夜は10発ずつ花火を打ち上げること」と、通達を出してみたら面白  
かろうと思った。

ついでながら、「第三階級」というのは“le tiers etat”（ルティエールゼタ）  
という。“tiers”（ティエール）というのは「第三番目の」という“troisieme”  
（トロワジエーム）の古語であるという。問題はその使い方で、日本語の「第  
三者」とか「第三国人」というのと同じセンスで使う。そこには数字の「3」  
という意味は薄れ、「除外されたもの・番外・ミソッカス」という「差別・  
排斥」のセンスが含まれている。これが特定の外国人を意味するというのは、  
日本だけの事情による。

気が付くと、町の本屋（と言ってもストラスブールという田舎町であるが）あ  
るいは大学の（と言っても、ルイ・パスツール大学という田舎大学であるが）図書  
室の書棚にある本には、“des trois ordres, le clerge, la noblesse et le tieres  
etat (bourgeois et paysans)”（三つの階級、僧侶、貴族、それに第三階級〔ブルジョ  
ワと農民〕）とあるばかりで、「第一階級・第二階級」という書き方を見たこ  
とがなかった。さらに、「第三階級とは何か?」・「リアン！（nothing!）」と  
あるのを見た。したがって、「第一階級・第二階級・第三階級」と書いている  
「日本の教科書」は、何か勘違い、あるいはフランス語を知らない人たち  
の勝手なデッチアゲではなかったろうか（という思いが絶えない）。

実はフランスは、現在でも食料を自給できる数少ない文化国家なのである。  
この「基本的には食べていける」ということが、ナポレオン軍を背後から支  
えていた。現在のフランス人も、面白いことに、「われわれは、文化的にも、  
孤立に耐えて、十分に自活していける」と考えている。事実、「ストラスブ  
ールだけでも、十分すぎるほどのバカがいる。これ以上のバカに会うために、  
わざわざ旅行する必要などまったくない」と言って、ヴァコーンスに出かけ  
ないリセ（高校）の教師に何人も会った。



Fig. 12 ストラスブール入り口

フランス革命戦争当時の雰囲気  
を伝える文章があるので、ご紹介  
しよう；

「私は1774年10月24日モンベ  
リエ（南フランス、ニース近くの街）  
で生まれた。18歳になったとき  
（1792年）、フランス革命はまだそ  
の緒についたばかりだった。1年  
前から義勇兵大隊が各県で組織さ  
れ、旧軍の第一線連隊と合体し革  
命軍となっていた。この諸軍団は  
すでに各国境に向けて進軍してい

た。革命軍に参加しないのは恥だと思い始めていたころ、親友の一人で、エ  
ロー県（コートダジュール・マルセイユの西隣の県）第一義勇兵大隊の曹長であ  
った友だちが、イタリア遠征軍所属のこの隊に入隊してはどうかと私に言っ  
た。私は喜んで彼の申し出を受けた。名高いイタリアに行って戦うのかと思  
うと、胸が熱くなった。母の同意を取りつけるのが大変だった。しかし母も  
最後には承知してくれた。母を深く愛していたから、別れはつらいものだっ  
た。イタリア遠征軍最高司令官アンセルム將軍は、私の到着する3カ月前か  
らニースに司令部を置いていた（ナポレオンはまだ無名の兵隊である）。私は一  
日滞在し、軍服、サーベル、銃、弾薬などの支給を受けた。」（『ナポレオン戦  
線従軍記』より）

このような軍隊に対して、封建領主・国王の軍隊が勝てるわけがない。三  
色旗を掲げたフランス遠征軍は、ほとんどの前線において勝利を続けていっ  
た。早くもフランス革命一周年記念日には、ライン河の国境の町ストラスブ  
ールでは、大きな三色旗を掲げて、「自由はここから始まる」というスロー

ガンを街の入口に掲げたという。しかし、ご承知の通り、1812年10月のモスクウ退却以後、ドレスデン、ライプツィヒ、ライン湖畔などで数々の追撃戦を挑まれ兵力を失い、ついにパリにまで攻め込まれた。さらに、1815年のワーテルローの戦いの決定的な敗北で、第一共和国・第一帝政時代は完全に終わった。その後、本著巻頭のドラクロワ描く1830年の「七月革命」まで、実に15年の反動の恐怖がフランスを支配した。ショパンは、この七月革命の次の年、1831年にパリにやってきた。

## § Sorbets (シャーベット) (お口直し)

ショパンは1831年の9月にパリに着いたといわれます。夏が終わり、気持ちの好い季節です。やがて、「ポアソニエール大通りに『小さな部屋』を借りるが、それは5階で、『モンマルトルからパルテオンまでの、パリの一番美しい地区が見渡せる、信じられないほど魅惑的なところ』だと手紙に書いた」といわれています (ヤレヤレ!)

沢山の説明をしなければなりません。まずFig. 13-Aをご覧ください。ポアソニエール (Poissoniere) というのは、図中に太く示した道で、パリ中心から北へ出て行く街道筋です (町名改正などしなかったのでよく分かります)。これは京都なら「北国街道」、東京なら「中仙道」といった感じになります。この道は、現在の地図で見てもFig. 13-Bに示したように、①～④の間では、②と③で示す点で僅かに屈折しています。ところがこの僅かな屈折のために、①～②の間以外では「モンマルトルからパルテオンまでを見渡す」ことはできないのです (パルテオンが隠れてしまう)。それでほとんど確実に、ショパンの部屋は①～②の間にあったことが推定できます。しかもショパンの部屋は、この通りの西側でなければなりません。それは、パリの家は通りに面して建てられるので、東側にあったのでは、反対側の家並みの屋根に視界を遮られてしまうからです。





パリで「5階」というのは、日本式には6階ということです。1階は“rez-de-chaussee；レドショセ「車道と同じ高さ」”とといいます。それで1階は、エレベータなどでは“0”と表示します。慣れないうちは妙な気がしますが、慣れてくると「0で始まる整数で数えるほうが、1から始まる自然数で暮らすよりも文化度が高い」と思えてくるから妙です。もちろん地階は（-）をつけて、マイナス1といい、ごく自然に正・負の整数で暮らします。ところで、「5階」というのは6階のことですが、これは“etage elevee；エタージュ・エルベ”とも呼ばれ、「屋根裏部屋」のことです。したが

ってショパンは、「ポアソニエール西側の屋根裏部屋からの眺めの話をしている」ということになります。屋根裏部屋の構造は、説明していると長くなりますので、Fig. 13-Cを参考にして下さい。いずれにせよ身を乗り出さなければ、「モンマルトルからパンテオンまで」を見渡すことはできなかったはずで、ショパンは「屋根裏部屋」とは書きたくなかったので、「小さな部屋」と書いたのでしょう（カレの気持ちも汲んでやって下さい）。

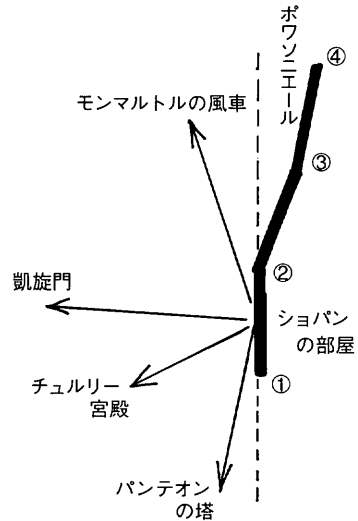


Fig. 13-B ポアソニエール通りの曲がり方。①②③④は、通りの折れ曲がりを示す。

なぜか、天才はよく屋根裏部屋（6階）で暮らします。1階が店舗ならもちろん、人は住みません。店舗でなくても1・2階は街の人通り（馬車の音など）がやかましい。また、4・5階は歩いて昇るのが大変です。それで3階の部屋代が一番高いのです。ときどき日本の旅行者が（通ぶって）裏道のホテルに泊まると、3階に入れられることがあります。（エレベータがないので）「3階まで歩かせやがる！」といってプンプンする人がいますが、ホテル側はサ

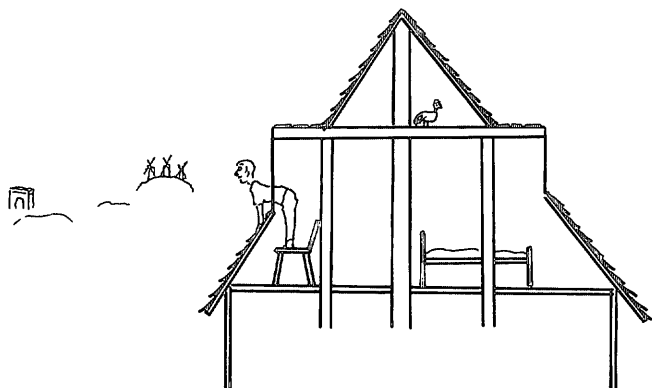


Fig. 13-C ショパンの屋根裏部屋（イラスト）

ービスしたつもりなのです（もちろんお代は、ソレナリニ頂きますが）。4階・5階は歩いて昇るのが大変なので、部屋代は下がります。マシテヤ「エタージュ・エルベ（高い部屋）」なら料金は格安です。ショパンが一番安い部屋を選んだに違いありません。私の知る限りでは、画家のモジリアーニ、数学者のポアンカレなどが、若い時は屋根裏部屋に住んでいました。ポアンカレは「鶏の止まり木部屋」と言ってました。Fig. 13-Cを見れば、そのわけがよく分かるでしょう！

では、ショパンはどんな景色を眺めたのでしょうか。今日、観光客が群がる白いサクレクル寺院はまだありません。ユトリロで有名なモンマルトルの階段もまだです。モンマルトルには「小さな急な丘」があるだけでした。「小さな丘」はbutte（ビュット）といいます。パリでla Butteと大文字で書けば「モンマルトルの丘」のことです。

幸いにゴッホの作品に“La Butte Montmartre（モンマルトルの丘）”というのがあります。1886年の作品ですから、ショパンが亡くなってから37年後の景色です（Fig. 14）人家もほとんどなく、ゴッホはこのふもとに住み着



Fig. 14 “モンマルトルの丘” ゴッホ, 1886年作

いたといわれます。風車が三台ありますが、「三台の風車」というのは、後世でも有名な話題です。図では分かりませんが、ゴッホは、風車のテッペンにひるがえる三色旗も描き込んでいます。この絵の1886年はナポレオン三世の第二帝政時代に当たります。パリ万博も開かれたばかりだし、エッフェル塔もつくったし、パリは再び盛んな時です。

ショパンが見た時には、モンマルトルの丘の上の風車の数は、もう少し多かったかも知れません。というのは、これらの風車は小麦粉をひくためのもので、小麦粉はもちろんパンに焼きます。モンマルトルの風車が、パリのパン屋の需要を支えていたという話もあります。しかし人口の少ない時の話で、やがて人口の増加に押されて、風車は機械に代わり消えていきました。モンマルトルも開発されて歓楽街ができました。現在では、「ムラーン・ルージュ（赤い風車）」という国際的にも有名なキャバレーや、「ムラーン・ド・ラ・ギャレー」という「踊り子」の絵で有名なダンスホール跡が、風車を付けて観光客を集めています。丘の上に風車小屋があったのは、もちろん、そのの

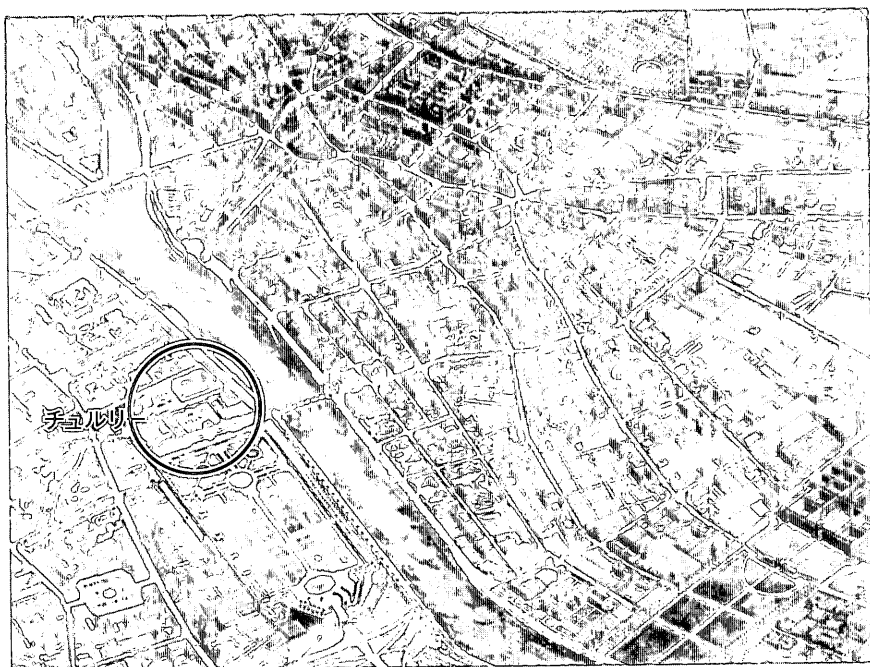


Fig. 15 1853年頃のパリ立体図（中央、セーヌ左にチュルリーのファサードが見える）

風が強かったからです。では、モンマルトルの丘がなかったら、パリのパン屋はどうしたでしょう？ 多分、セーヌ河畔には水車小屋が並んでいたのではないのでしょうか。

ショパンの視界の左手の端には、パンテオン（神殿）が見えています。これは1790年の完成で、ナポレオンにより、1806年に「教会」にされました。公共物になったのは1885年ですから、ショパンはまだ、そう勝手には入れなかったはずです。

モンマルトルとパンテオンの間には、ショパンには見えて、われわれには見えないものがあります。ショパンの屋根裏の窓の中心からやや左寄りに、

「チュルリー宮殿」が見えていたのです！ それで「信じられないほど魅惑的なところ」だと言ったのです。なぜなら、さらにその右手には、1806年に着工し1836年にやっと完成した「凱旋門（トリオンフ）」が、ほとんどでき上がっていたはずなのです。この二つが向き合って（にらみ合って）建っていてこそ、「セ・サ・パリ！（これぞパリだ！）」と言えます！ チュルリーは1871年に炎上しましたから、この「にらみ合い」が見られたのは、僅か35年間だけです。



Fig. 16 セント・ヘレナのナポレオン

今日の「凱旋門」は、1805年のアウステルリッツの「三皇帝会戦」でフランス軍が勝った時、ナポレオンが「凱旋門を通して帰還させる！」と部下に約束したので、その翌年から工事が始まりました。しかし、ナポレオンは1815年にセント・ヘレナに送られてしまいました。その後、やっと1836年に、今日見られる形ができ上がりました。

皆さんは、今日の凱旋門を見て、不思議には感じないでしょうか？……「凱旋門を通して、ドコへ行こうというのでしょうか？」・「しかもこんな街はずれに造って？」……ソウデス！ もう一度、Fig. 13-Aのパリの古地図を見て下さい。凱旋門のあるところは、まさにパリの古い城壁のすぐ外なのです。パリはここから始まったのです。凱旋門を抜けて、パリに入城し、そのままションゼリゼー大通りをマッスグに、正面のチュルリー宮殿まで行進す

る。権威の象徴のチュルリー宮殿には、すでにナポレオンが住んでいる。そこでナポレオンが腕を高く上げて、兵士たちと一緒に、「三皇帝会戦」の勝利を祝うはずだったのです！……凱旋門とチュルリーを一直線に結ぶションゼリゼーは、さぞや晴れがましい大通りとなったことだったでしょう。

凱旋門からチュルリーのファサード（正面）まで、2,900 m ジャストに造られた一直線の通りの両側には、三色旗があふれ、「ヴィーヴ・ランベリユール！ ヴィーヴ・ラフロンス！」の聲がこだまし、兵士たちはラ・マルセイエーズを歌って行進するはずだったのです。それは、ニューヨークの紙吹雪にも似た歓喜の表現であり、「曲がりなりにもたどり着いたフランス大革命のフィナーレ」を飾るはずのものだったのです。だが、フランス人が気がついて、ナポレオンの遺骸を掘り起こし、セント・ヘレナからアンヴァリッドに迎え入れるまでには、さらに25年を要しました。仰々しい葬列は、凱旋門から入りションゼリゼーを通過しました。しかしそこには、もはやホゾを噛む思いの重苦しい気配しかなかったのです。

ナポレオンは、アウステルリッツの戦いでオーストリア軍から奪った1,200門の青銅の大砲を持ち帰り、鑄つぶして円柱を造らせ、チュルリー宮殿のすぐ近くのヴァンドーム広場の中央に立てました。円柱のテッペンには、今日では、弾丸の飛んでくる前線で、直接指揮を執る「小伍長」のナポレオン像が立っています。このように、「凱旋門・ションゼリゼー・チュルリー」は「ワン・セット」であってこそ意味が読めるのです。

ションゼリゼーの街路樹を豆電球のイルミネーションで飾りたて、観光客に「マア・キレー！」と言わせる「美しいパリ」を気取ってみても、それは「観光ズレした、子どもダマシのオアソビ」にすぎない。これで、フランス人は、アメリカ人の「ウイスコンシン・デールのインディアン部落」や、「ニューヨーク郊外の恐竜公園」を笑うつもりか？ アウステルリッツの三

皇帝会戦の世界史的意義は、そんなものではなかったでしょう？

「ヴァンドーム広場」の周辺は、しだいに銀行家の金持ち連中が住みつくようになりました。今日では、リッツ（Ritz）などという超・高級ホテルができ、ご存じダイアナは、パリの最後をここで過ごしていました。実は、われらのショパンも、このヴァンドーム広場のアパートで、短い一生を終わるのです。

ヴァンドーム広場に出る「リュ・ドラペ（平和通り）」の高級品店のショーウインドを眺めて歩いた。サファイアのイヤリングを一組だけ飾ってある店があった。どのくらい眺めていたか、ついに溜め息が出た。あとホンノ僅か薄ければ、「色が薄い！」とケチを付けたであろう際どい青色の石を、5ミリ角ほどの立方体に切ってある。イヤ、ニクイこと

に、縦がほんの僅か長い！ 値札は付いていない。どんな女性の【もちろん男性の】耳も、これを付けられたら負けてしまう。フランスの職人は、ついに女神にしか似合わないイヤリングをつくってしまったのだ【人間とはなんてキタナラシイものだろう】と思った。

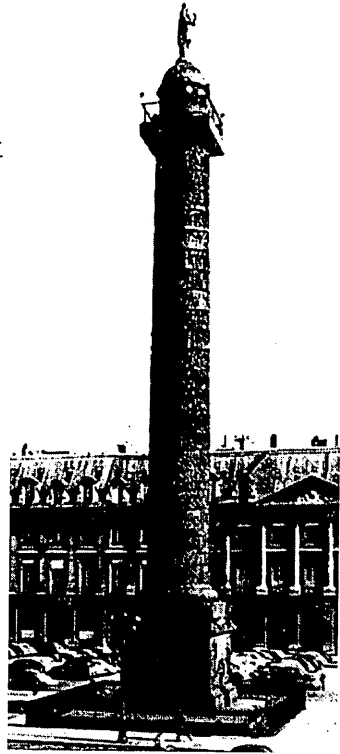


Fig. 17 ヴァンドーム広場の円柱と  
先端のナポレオン像

チュルリー宮殿のファサードはどんな様子をしていたのでしょうか？ それが意外とあまり記録がないのです。なんとか拾い集めたものを Fig. 18 に示します。チュルリー宮殿は、1871年にフランスがプロイセンの報復を受け（普仏戦争；最近では独仏戦争とも言います）、ナポレオン三世がビスマルクに敗

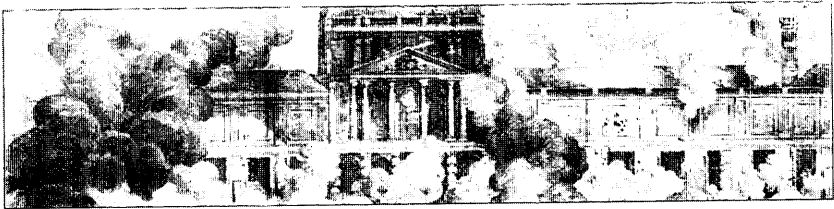
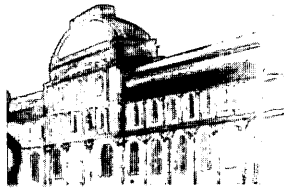


Fig. 18 チュルリー宮殿のファサード

北した時に炎上しました。しかし火をつけたのはフランス人です。

プロイセンのビスマルクは、1866年にオーストリアとの戦いに勝って、ドイツ統一の足元を固めた。ビスマルクは、年を取ってボケてきたナポレオン三世を挑発し、ついにプロイセンに宣戦を布告させた。待ち構えていたプロイセン軍は、たちまちライン河を渡り、アルザッスを突破し、ロレーヌのメッツ (Metz) にフランスの主力を包囲した。驚いたナポレオン三世が自分で救出作戦に出かけると、ロレーヌのさらに西のシャンパーニュのスダン (Sedan) で包囲されてしまう。フランスは降伏した。スダンには11世紀からの要塞があり、16世紀まで使われていた。ここに立てこもったナポレオン三世が、プロイセン軍の700門の大砲の集中砲火を受け、83,000人が捕虜となったという。スダン・アルデンヌ・ベルダンなど、この辺一帯には、この百年間のフランス兵の墓標が果てしなく続く。

フランス降伏の報に驚いた議会と残留の軍隊は、パリを捨てて西へ20キ





Fig. 19 “謎（なぜ？）” ギュスターヴ・ドレ，1871年作【炎上するパリ】

ロのベルサイユに逃げ込む。政治・軍事ともに空白になったパリに放棄された市民が組織したものを「パリ・コミュン」という。やがて、ベルサイユもプロイセンに降伏した。かくてパリは、西にベルサイユ軍、東にプロイセン軍の包囲を受けた。40日におよぶ包囲・籠城の飢餓の末、ついにベルサイユ軍がパリに突入し、数カ月間で4万人におよぶ虐殺が始まった。セーヌは血で赤く染まったという。民衆は、ついにチュルリーなどに火をつけた。

Fig. 19にギュスターヴ・ドレの絵をご紹介します。“謎”という題で、別名を“なぜ（プ・クワ？）”という。画家は当時直接パリにいた。“なぜ”という意味は、パリは、なぜフランス人とプロイセンの両方から攻められるのか？ということであろう。

この時すかさず、マルクスが『フランスにおける内乱』という著作を書き、「パリ・コミュン」を「プロレタリア革命の手段である」と限りなく持ち上げた。やがてそれが東へ・東へと伝わり、まるで「聖典」であるかのごとくに受け継がれた。幸いにしてわれわれは、ベルリンの壁が崩れると、すべ

ては虚構であったことを直接見る事ができた。

マルクスがフランス語をシャベッタという話を聞いたことがない。したがって、パリ・コミューンとはどんなものか、彼にはよく分かっていなかった可能性は大きい。つぎに、コミューンの主体は下層民衆であるから、彼等のフランス語自体が、中上層のフランス人にさえ、どのくらい分かったかは疑問である（フランス語には、およそ4層ある）。

精神病理学の本にはこうある；「分裂病の特徴の一つは、彼等が認知したと信じる事実の上に堂々たる体系を築き上げることである。だが、その『事実』が事実を反映していない。それで、すべての虚構が崩壊する」と。したがって、パリ・コミューンには工場労働者はほとんどいなかったとか、パリは産業革命に遅れた手工業都市であったとか、枝葉末節のことを議論する必要など全くない。彼等の「事実」が事実と異なると指摘すればそれで十分である。その事実とは、フランス人は「パリ・コミューンは『二度あった』と言っている」という事実である。つまり、マルクスは最初のコミューンを見落とした。ましてや、「プロレタリアの独裁」などとは、誰も、考えてもシャベッてもいなかった。

フランス人の第一回目のコミューンとは、1793年1月23日のルイ16世の処刑から、7月23日にロベスピエールが多数を占めるまでの、嵐のような、パリ民衆による「反革命議員の追放」を指す。われわれの歴史教科書では、全く無視されている部分である。「1871年のパリ民衆の蜂起は『1793年の、偉大な思い出に深く根ざしている』」。これが、フランス人の心の中にある事実である（嘘だと思ふなら自分で確かめたらいいでしょう）。

チュルリー宮殿は、その後どうなったか？ 焼け跡を修理したいという人は現れませんでした。大体、ルイ16世からしてベルサイユの方がお気に入り

りでした。それで、10年ほど放置してあったあとで、「過去のイマワシイ思い出を取り除く」といって、現在のように、「西に向かってアケツピろげ」のルーブルが、修理・新築・増築された。それでパリは、現在のような「シマリノナイ」都市になった。だって、フランス人がそれを望んだのだから仕方がないでしょう！ 誰にとって何がイマワシイか？ 「皆にとって全てが」ですよ！

## § Plat principal 2 (主菜2)

ショパンがパリに来た時、彼は手紙に書いた；「街角ごとに性病薬の広告のある、この汚い町！」と。ソウです！ あの屋根裏部屋から眺めた「信じられないほど魅惑的なところ」がパリならば、「この汚い町」もパリである。ショパンはまず「ボアソニエール」に落ち着いた。やがて、そこから歩いて10分ほどの「キャデ（青年貴族）通り」にあるサロン・プレイエールでコンサートを開くチャンスがきた（というよりは、サロン・プレイエールに近いところをねらって、部屋を探したのではなかったか）。Fig. 20はその日のプログラムである（という）。判読を試みると、あらまし以下のようなことが読める：

Grand Concert

vocal et instrumental

Par M. Frederic Chopin, de Varsovie

Dimanche 13 Janvier 1832, a huit heures precises du soir,

DANS LES SALONS DE MM. PLEYER ET Cir.,

Rue Cadet, 16. 9

.....

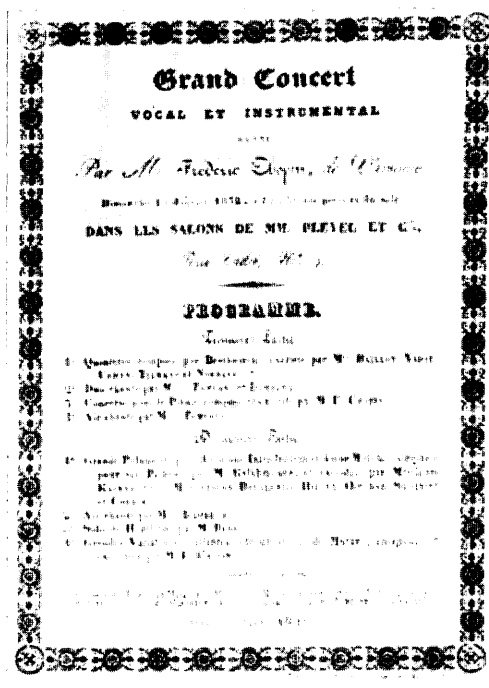


Fig. 20 サロン・プレイエールのプログラム  
【1832年1月13日（日）の日付がある】  
（ショパンのデヴェュ公演）

## PROGRAMME

### Premiere Partie

1. Quintetto composee par Bethowen, execute par Mme Baillot, Vidal, Unuan Tilmant et Norbrin
2. Duo chante par Mlles Tomeoni et Isambert.
3. Concerto pour le Piano, compose et execute par M. F. Chopin.
4. Air chante par Mlle Tomeoni

Dereniere Partie

1. GrandePolonaise, precedee d'une Introduction et d'une Marche, composee pour six Pianos, par M. Kalkbrenner, et executee par Messieurs Kalkbrenner, Mendelsohn-Bartholdy, Helen, Osbanne, Sowinski, et Chopin.
2. Air chante par Mlle Isamoeat
3. Solo de Haathois, par M. Baeu
4. Grandes Variation brillantes sur un theme de Mozart, composee et executee par M. F. Chopin

.....

PRIX DU BILLET 10 m [ ? ]

ヤレヤレ。またまた沢山のことを言わなければなりません：

まず第一に、「音楽ができず」に、つまり、音符が読めたり何か楽器が演奏できたり、あるいは歌がうたえるというように、何かしら音楽の「演奏実技についての、経験的な理解」なしに、「ショパンの音楽史」を語ることはできないでしょう（理解と知識は違います）。しかしもし「音楽史」を語るつもりがなければ、つまり、ただの「好き嫌い」を言うだけならば、「音楽ができる」必要はないでしょう。「ピアノの弾けない人は聞きに来るな」と言っているのは、ピアノ演奏家はやってゆけないのです。

第二に、「何の歴史」についてであろうと、歴史とあれば「ことば」の問題があります。実は何の問題でも、「ことば」がからむと、やっかいになります。たとえば、外国の音楽は（オペラでもシャンソンでも）原語で理解した方がいいのか、「日本人ナラバ日本語デ理解シタ方ガイイ」のかという問題は、私にとっては、たぶん一生、答えの見つからない問題になるでしょう。

このように声楽には、器楽や絵画にはない「ことば」の問題があります。

したがって「音楽史」を勉強（あるいは研究）するには、その音楽家のしゃべっていた（つまり暮らしていた社会の）「ことば」の理解なしには、たいして進めないと思います。これは、「科学史・物理学史・半導体史」、あるいは「軍事史」でも同じでしょう。「歴史は言葉でカタラレル」。つまり、どう力んでみせても、エバツてみせても、「歴史とはツクリモノ・カタリモノである」のです。「歴史と事実」とを混同することは、どうしてもできないのです。

ここに「歴史と歴史学」の落とし穴があります。「客観的事実」というものは（もし客観性ということを強調したいならば）、「主観と客観」の区別を立てる「現代哲学」の方法論がもとめられます。しかし、「客観的歴史」などというものは存在しない。ところが存在しないものでも、いくらでも言葉で表わせる。それを、「存在するものは必ず言葉で表現できる。したがって言葉で表現できるものにはスベテ実体がある」と、サッカクするのです。さらには、「存在しないものはニンシキできない・したがってニンシキできないものはソンザイしていないのだ」などなど、(カレラの) 認識上の錯覚には果てしがない。

以上の議論をもっと詳しく（平たく）言うならば、二つの『短い時間間隔において』続いた歴史的事実（複数）の場合は、事実と事実をつなぐ「原因と結果」の関係が、よく透けて見えるのが普通です。これを「因果律」といい、普通の人には「こうだから、コウナツたのだ」（アンナコトさえしなければよかった）と言います。人類という生物の共通の喜劇（あるいは悲劇）は、この「原因と結果のステップ」は、「そんなに沢山は重ねられない」ということに気がつかなかった（まだ気がついていない人も沢山いる）という点にあります。その根本的な原因は、人類は「時間を直確できない」からなので

す。

百年・千年にもわたる、沢山の客観的・歴史的事実を、因果律で、つまり「原因と結果の関係」という一本の糸で貫くには、その「糸の存在」を信じる（あるいは盲信する）「確信」（あるいは偏見）を必要とします。これを普通には「史観」といいます。ここまでの議論を、「歴史的事実には史観はない。しかし歴史には史観がある」とまとめることができます。ところが「史観はいくらでも立て直すことができる」ので、「歴史はいくらでも書き直すことができる」。事実「歴史は何度も書き直された」のです。

マリー・アントワネットがフランスに嫁来ると、「フランスの歴史」の特訓が始まった。おそらく現在でも、どこの国でもやっていることであろう。彼女は賢い。彼女は言った（ということになっている）「ドウセみんなツクリ話なのでしょう。それなのに、どうしてこうツマラナイのでしょうか！」

マリー・アントワネットが育ったオーストリア王家に対しては、「ハプスブルグはズボンがはけない」という悪口があった。ハプスブルグ王家には、女の子ばかりが生まれたからです。しかし「女系家族」というのも悪くない。むしろ、次々と「良い養子」をとって、先祖伝来の稼業を（学者稼業さえも）続けていくことができる。これに対して、なまじの男系は、「三代目」で稼業が減じる例にはこと欠かない。ハプスブルグはヨーロッパ全土に結婚政策を推進し、とにもかくにもヨーロッパの平和を確立した。だから、女ばかりが集まって（男のバカさ加減について）シャベクリまくっていた「オーストリアの歴史」は、（椅子から転がり落ちるほどにも）面白かったに違いない！ それに比べれば、アンリー何世の女装趣味がどうだとか、太陽王のルイ14世がどうの、女グルイのルイ15世がどうしたという「男の歴史」など、彼女にとって面白かったはずがない！

わが国の、源氏物語の第二章「ははき木の帖」にも、有名な「雨夜の品定め」の一節がある。夜になり雨が降り出し、夜遊びに行けなくなった貴公子たちが時間を持て余し、「女の話」に花を咲かせるという状況設定である。国文学者たちは手放しでほめる。しかし、「女の書いた、男がする『女の話』」など、「男が読んでも」ちっとも面白くない。紫式部はオナゴだからタカが知れてる。やはり「女については、ただ男にのみ語るべきだ」（『ツアラトストラかく語りき』第一部）と言い放ったニーチェの名言には勝てない。マリー・アンターネットもきっと、「男（の歴史）については、ただ女にのみ語るべきだ」と言いたかったのであろう。

以上の（高度な）議論に入る前に、「事実の誤認」があったのでは歴史書の信頼性はガタ落ちになる『ここにこの小品の存在理由がある』：

まず、われらのショパンが出演する「プログラム」にはこうある：

- ♪ **Grand Concert** グロン・コンセール；これを「大音楽会」と訳すのは、半分間違いである。音楽会には違いないが「大」は誇張であろう。その理由はやがて分かる。
- ♪ **vocal et instrumental** ボカール・エ・アンストルモンタール；これを「声楽・器楽大演奏会」と訳すのも半分間違いである。「歌と楽器演奏（のタベ）」くらいがよかろう。なぜなら、l'instrumental というのは、シャンソン歌手が登場する前などに、ピアノだけを軽く聞かせる「場つなぎ」などにも用いる言い方だからである。
- ♪ **Par M. Frederic Chopin, de Varsovie**；フレデリック・ショパン氏、ワルシャワより来る。
- ♪ **Dimanche 13 Janvier 1832**；1832年1月13日（日曜日）『しばらく御記憶下さい』
- ♪ **a huit heures precises du soir**；夜8時キッカリ（開演）  
なぜ、キッカリ（precises：プレシッス）などと書くのでしょうか。それ



はたぶん、キッカリには始まらなかったからでしょう。その理由もじきに分かるでしょう。

♪ DANS LES SALONS DE MM. PLEYER ET Cir.; 場所は、プレイエール氏（複数で書かれている：兄弟・親子？）のサロン（これも複数の客間）、それと Cir（たぶん周辺の部屋も、という意味でしょう）。要するにこれは、プレイエール家の「サロン」を使って開かれる演奏会です。決して、SALLE（広間・劇場）での演奏会ではありません。

♪ この日のサロン・プレイエールの住所は「Rue Cadet, 16. 9」となっています：

キャデ通り 16 番の扉のノッカーを叩くと、扉の横の「管理人の住居・アパート」にいる管理人がドアを開けてくれます。そこでこのプログラムを見せると、「9 号室だ」と言います。たぶん 3 階でしょう。ドアを閉め、真っ直ぐな狭い廊下を進むと、建物中央の広間に出ます。ラセン階段があります。それを 3 階まで上がると、その広間に面してドアが三カ所にあります。ドアの上の「9」の数字を確かめながら、またノッカーを叩くと内側にドアが引かれて、プレイエール家の門番が現れます；

“ボンソワール・ムッシュショパン！……パリスイー・スイルヴプレー！”  
“ムッシュショパン・エタリヴェ！”

♪ 日時は 1832 年 1 月 13 日（日曜日）、8:00 p.m. から（お待ちいたします）とある。すでに、有産市民（大金持ち）と貴族出身の紳士・淑女があちこちの部屋で、ベチャベチャとオシャベリ。香水とオーデコロンの匂いが立ち込めている：

“ダコー・トレジュリユール・スイヴヴレー・コネセヴェーラヌヴェール？”

夕食後なので、甘いガトー少々・ローミネラルのキャラフ少々だけが出ている。

やがて、ホストのプレイエル夫妻登場、しきりの挨拶と外交辞令的微笑・握手、耳タブ・手袋をした指先などへの軽いベゼの連続……

われらのショパンは今夜の主客……しかしそこはワルシャワ出身のイナカ者……

おおぜいのパリ・ジエンヌ、パリ・ジアンに華やかに囲まれながら、ヘドモドと、父親仕込みの、アルザスなまりのフランス語で応えている……

“ウエー・メッシュュー、ノーンパザンコール、ヴンドウゾーン（22歳です）”

やがてプレイエル夫妻が広間に移り席に着く。Bethowenの弦楽五重奏が始まる。

時刻は、8時45分（それより早いことなどあり得ない！）頃は1月。部屋は寒い！

ところが、ショパンの「音楽史書」にはこうある：

“パリのデビュー演奏会は、その年の12月25日に予定されたが、都合で翌年に延期され、カルクプレナーの突然の病気などで、やっと2月26日に実現した。場所はカデ通りのサル・プレイエルで、プログラムには「声楽・器楽大演奏会」と印刷されていた”。

これは一体なんだ？ 「プログラムには」というのは、たった今Fig. 20で検討してきたプログラムのことである（と言っている）。ところがプログラムの日付は、2月26日ではなく1月13日ではないか。場所も「サル・プレイエル」ではなく「サロン・プレイエル」であった。この謎を解くカギはただ一つであろう：この「音楽史家」にはフランス語が分からない。「サル」

と「サロン」も違う。サルは劇場、サロンは客間である。

現在の Salle Pleyel は、252 rue de Faubourg, St-Honore (フォブール通り 252 サントノレ) にある。【サル・プレイエールはパリ一番のコンサートホールで、パリ交響楽団の本拠である】その位置は、凱旋門から北西に入り、モンソー公園に抜ける「オッシュ大通り」の途中の、凱旋門から 600 m ほど進んだところにある。まさか、こんなことになるとは思わなかったので、サル・プレイエールに関心を持ったことなど一度もなかった。

「1832年2月26日」にショパンがデビュー演奏をした時、当時の「サル・プレイエール」は 252 rue de Faubourg, St-Honore にあったか？ この疑問に対する正確な答えは、いずれプレイエールの「社史」でも探して調べることとして、今回はさしあたりの応急処置として Fig. 21 を覗いてみることにした。これは「チュルゴーのパリ立体図」というものである。見ての通り、凱旋門とチュルリー宮殿の両方が描き込まれている。すでに述べた通り、この二つの建物が共存したのは、僅か 35 年間であり、これがまさにショパンの見たパリである。ところが、この図の説明が 1739 年となっているのが情けなかった。すでに述べた通り、凱旋門の建設は 1806 年に始まり、完成したのは 1836 年である。したがってここは「1839 年に書かれたもの」という説明が正しいはずである。

現在のサル・プレイエールの位置と比べながら Fig. 21-B を覗き込んでみると、確かに周囲よりも随分と大きい建物が見える。だがそれは、回廊付きの建物のようにも見える。したがって結局、これだ！ と言い切る自信はない。しかし以下の議論はできる：

演奏会の前半の 3 番目の演目に「ピアノのためのコンツェルト、ショパン作ならびに演奏」というのがある。ショパンの歴史書には「ショパンはこの

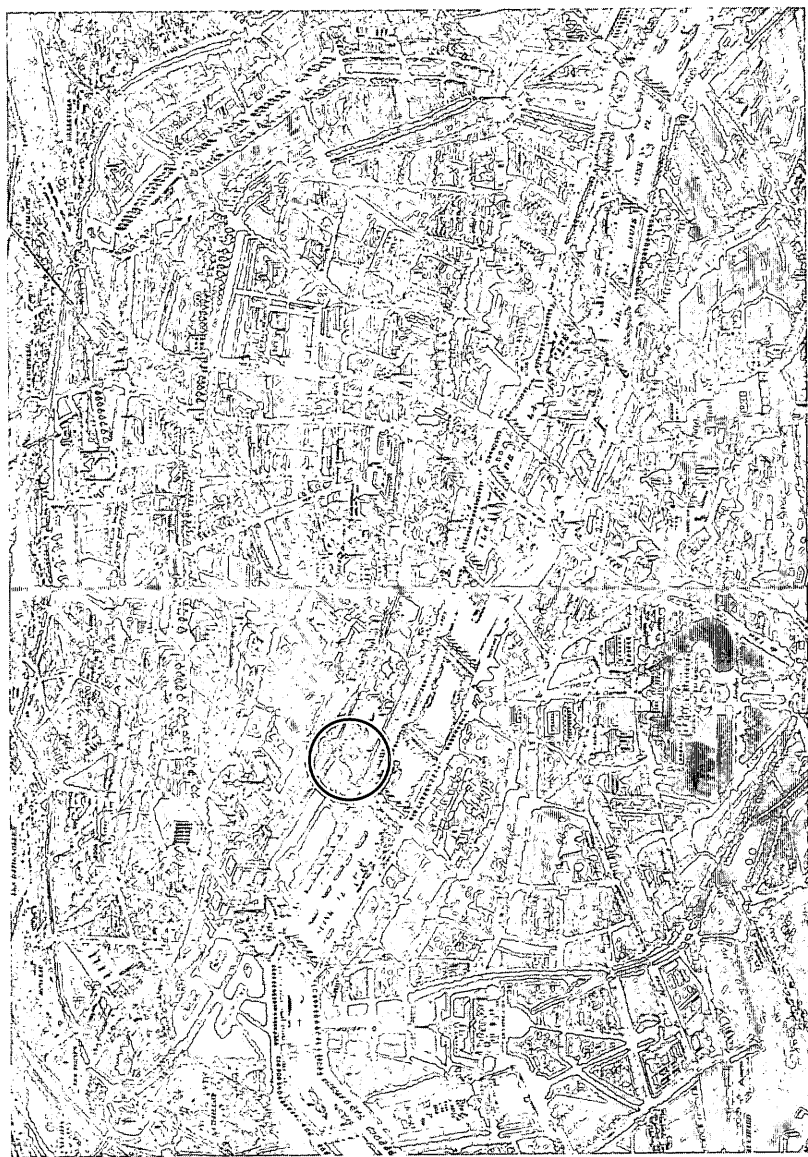


Fig. 21-A チュルゴーのバリ立体図, 1839年

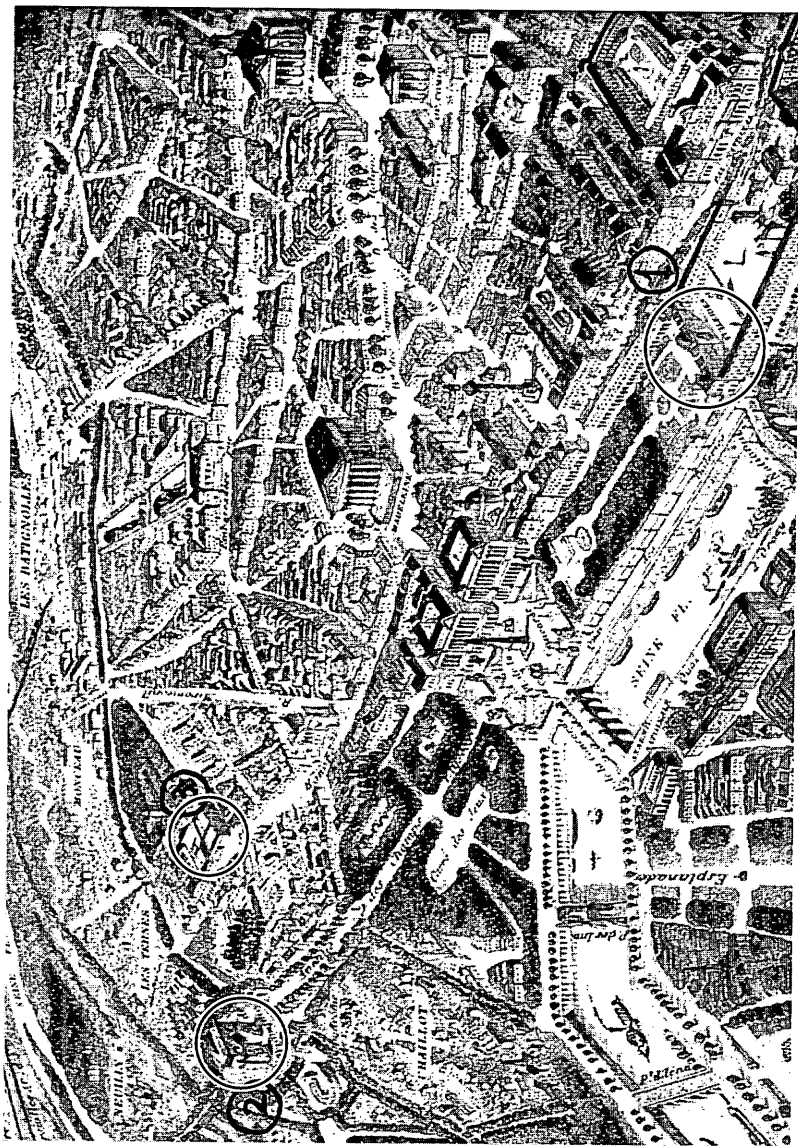


Fig. 21-B チェルゴーのバリ立体図, 1839年のFig. 21-Aの部分拡大図 (チェルリ一①と、凱旋門②とが同時に見られる。  
③は現在のサル・ブレイエールの位置に認められる当時の建物 (なんでしょう?) )

演奏会で、ヘ短調の協奏曲と……を弾き……」とある。これが実に不思議な、納得できない話なのである。

ヘ短調のピアノ協奏曲というのは「ピアノ・コンチェルト第2番」といわれているもので、「第1番」より先につくられながら「印刷の都合で第2番と呼ばれている」というイワクツキのものである。ここでの問題は、これは協奏曲であるから「協奏する」オーケストラが必要である、という点にある。「パリ・キャデ16番9号のサロンでオーケストラを聴いた」というのが、小生にはどうにも納得できない。その理由を並べよう；まず第一に、オーケストラの楽員が何人来たか知らないが、サロンとは、彼等がドヤドヤと入り込むような場所柄・建築構造ではない（はずである）。第二に、貴族・ブルジョワのサロンに、たとえ演奏のためであろうと、身分・得体の知れない楽員が入れるわけがない（これがフランスである）。第三に、日本の名女流ピアニストが絶賛するように、「まるでベートーヴェンを思わせるようなあくまで厳格で古典的な手法で構成された骨格……70小節からなるオーケストラの提示部のあとへ……ピアノソロのカデンツがいきなりフォルテシモで開始される」。こんなものがパリのサロンで受けたわけがない！（今もこの曲を聴きながらキーを叩いているが、ロンドン交響楽団の演奏はウルサイばかりだ！ 第一この交響楽団（LSO）は1904年にできたので、ショパンがピアノを弾いていた時には、どこにいたのか?!）。第四に、この曲はおそらく、さんざんイジくりまわして、第1楽章と第3楽章とはあとから付け加えたものであろう（それで出版があとになったのではなかったか？ もうコリゴリしたので、ショパンは二度と協奏曲はつくらなかった [のではあるまいか? ]）。

おそらくショパンは、この時、お気に入りの第2楽章だけを弾いたのだろう！ その証拠には、オーケストラの名前がプログラムに出ていないではないか？ パリ交響楽団はいつできたのか知らない。しかしパリ音楽院はすでにあった。1822年のパリ音楽院院長はケルビーニであり、彼は仕事をそっ

ちのけにして、「革命とコレラについてばかり話していた」ことが分かっている（両方ともハヤリものだから、最先端の話題というわけだ！）。

では、第2楽章の背景は誰が弾いたのか？ ソレですよ！ プログラムをよく見て下さい。第一部の演目の1）はBethowenの弦楽5重奏です。出演者の名前も出ている。マダムベロー、ヴィダール、イヌーアン、ティルモン、ノルブランの5夫人です。今となっては誰とも分からないが、パリ音楽院の所属か、ブルジョワ・貴族のご夫人たちであったのだろう（今もこの第2楽章だけを聴きながらキーを叩いているが、ピアノの背景にはこれだけで十分に聞こえる）美しい5人が弦をひいている前で、ショパンが一人で静かにピアノを弾いている（これこそフランスである！【ロンドンの連中なんかに何が分かる！】）。

この晩のサロン演奏会には大勢で演奏する演目はない。前半の1）は、女性5人の弦楽5重奏。2）は二人のマドモワゼルの二重唱。3）はショパン一人（プラス女性5人）。4）はマドモワゼル・トメオーニの独唱（題目未定）。休憩。後半の1）は、男ばかり6人のピアノ6重奏。（ピアノはブレイエール社製）で「序奏つき大ポロネーズ行進曲」カルクブレナー作、カルクブレナー、メンデルスゾーン（バルトニー）、エレン、オスバン、ソウインスキー、ショパン等の演奏（ショパンはカルクブレナーに弟子入りし、彼のツテでサロンに出る）。2）は、マドモワゼル・イサモエアの歌（題目未定）。3）はバユ氏によるHaathois（不明）の独奏。最後がショパンの「モザールのテーマによる大変奏曲」の自作自演。

最後の曲が、当夜のショパンが最も「期待と面目」を掛けた演奏題目であったのだろう。というのは、ウィーン時代の1830年に、シューマンがこの曲の楽譜を見ただけで、「天才だ。皆な帽子を取りなさい！」と激賞してくれた（という）作品だからである。その後、この曲は演奏されることがほとんどないといわれるので、譜面の読めない小生には、好いも悪いも分からな

い。シューマンは、その後うつ病が高じて、ハイデルベルグの有名な橋から、一人投身自殺をはかったが未遂に終わる。シューマンの妻クララは、廃人同様になった夫の曲を懸命に弾きまくった。おかげでシューマンの名前は後世に残った。

当時のショパンにとって、シューマンの評価は幸運であった。しかし、パリの「サル・プレイエール」で（後日）おこなわれた（であろう）本番のデビュー公演は、ブームを起こすほどの出来ではなかった（という）。専門家は、その原因を、ローマン派になり切れていない「ショパン自身の楽風」のためというが、そればかりのはずはないでしょう。

ショパンは、「ボクは公衆の前に出るとムネがドキドキして、アガッてしまうので、演奏会は好かない」と言った（という）。そのため、彼はサロンに身を隠す方を選び、それがまた、彼のその後の人生を決めていった。あり得ることだ。しかし、なぜ公衆の前に出るとアガッてしまうのか？ その点の説明はついぞ聞いたことがない。「そんなことはアタリマエだ。アガル人は幾らでもいるではないか」という人は、想像力が乏しいというべきだ。ショパンには「ピアノならヒトカドに弾ける」という、絶対の自信があったに違いない。シューマンの賛辞は、20歳そこそこの彼にとっては、やはり効き目があったであろう。それが・なぜアガルのか？（「彼はそういう性格だったのさ」と言う人は放っておこう。「何にでも簡単に説明をつける人」とはマジメな議論ができない）。

ここでショパンの身になって、皆の前に出るとなぜアガルのかを心配してやると、二つの可能性に気がつく。一つは「社会的理由」、もう一つは「芸術的理由」である。

第一の「社会的理由」というのはこうである；すでに述べたように、ショ



パンの父は、何らかの理由でフランスには戻らない、いや多分「戻れない」のである。同様に、ショパンも二度とポーランドには戻らなかった。多分これも「戻れなかった」のではないかと想像される。ショパンの父については、気の毒なことに、この小論では「同性愛上の理由によって、教会勢力に烙印を押された人物」と仮定してきた。彼の「名誉のために」、ここで一言つけ加えておけば、これもすでに述べたように、彼の方で、ご領主様の片思いをハネツケたとしても同じ結果になるのである。女難・剣難・水難・火難に加えて、美少年には「男難」が付け加わる。彼等にとっては「男も怖い」のである。もし教会勢力の追及がシツコイものであれば、「アイツの子がこんなところに来ていましたヨ」と、いつ告げ口されるか分からない。これこそまさに、「親の因果が子に報い」というものである。

実は、そんなにオオゲサなことを言わなくても、「不特定多数の前に身をさらす」というのは嫌なものである。たとえば、最近はやりの「成人学級」とか「終身教育」などと称する会合の講師にされると、生徒さんの中には、どんな人が混じっているか分からない。一般に、そういう人の質問はシツコイ。教育の主旨に対する意見は保留するが、講師になる（される）のなどマッピラである。さらに実は、この「推理小説」では、最後にとんでもないドندن返しを用意してある。今は、「お楽しみに」というほかはない。

「芸術的理由」については、「ショパンはミスタッチをしたか？」というフザケタ疑問が、ある日フト浮かんだ時に気が付いた。これは「作曲家と演奏家とは両立できない」という結論に至る、重要な疑問であった。小生の専門分野では「研究者と教育者とは両立できない」と表現されている、悲劇的・喜劇的・命題と同じパラドックスである。

ショパンは自分の作品を永いことイジクリマワシていたので、「これは何年の作品である」と決められないものがあるという。もしそうであるならば、

ショパンにとって、自分の作品を「いつ・どう弾こうと」自分の自由・勝手である。それが演奏会の最中に起きてても不思議はない。事実、こういうやり方は、サロンでは喜ばれたであろう。ところが「音楽が大衆化」して、楽譜を持って演奏会を聴きにくるような、「熱心な勉強家」が現れる時代となっていた。彼等は「努力すれば才能が伸びる」と誤解したのである。こういう連中には、「芸術的理由」と、ミスタッチという「技術的理由」とが区別できない。いや彼等は、「芸術と技術」の違いさえ、理解できる感性と脳ミソを持っていない。

しかもその上に、サロン・プレイエールとサル・プレイエールとが分化したのとはほとんど同時に、「批評家」と称するものが現れたであろうことは、想像に難くない。彼等が若いショパンを評して、「彼にはミスタッチが多い」と言わなかったと考える方がどうかしている。なぜなら、それが彼等のセールス・ポイントであり、またそれ以上のことなど彼等には分からないからである。「ドイツ人の幸せは、批評家になることである」とニーチェは言った。フランス人だって同じだ。『もちろん日本人こそ例外ではない。』

これだけ述べれば、なぜショパンが演奏会を避け、サロンに入り浸っていたかが理解できよう。サロンとは人を（上手に、エレガントに）褒めるところ、演奏会とは人を（上手に、インケンに）ケナスところなのである。われらのショパンだって、褒められる方がケナサレルより好きだったのである。だが、ゲスな人はこう言うであろう；「サロンだって人をけなしただらう？」そうです！ だから、その人には「次回のオマネキ」が来ない。それでサロンには、いつも「前回褒められた人だけが来ている」。幸い、ショパンには毎回オマネキが来た。彼にとって、この居心地のよい招待を断る理由など、どこにもなかったのである。それを人は「入り浸り」と表現しているにすぎない。『よくお分かりいただけない方には、トルストイの『アンナ・カレーニナ』をお読みになることを、切にお勧めします』

ひとは言うかもしれない、「サロンに入り浸っていただけでは、食えないだろう」と。ところが（驚いたことに）サロン演奏会は有料だったのである。Fig. 20に示したプログラムの末尾にはこうあった；

“PRIX DU BILLET 10 rn [? ]”（入場料10 [? ]）

残念ながら最後の印刷がよく読めない。10フランならば、普通はfrと書く。したがって、rnのように見えるのはfrなのかも知れない。ほかの可能性としては、サンティーム（centime）と古い単位のリーブル（livre：現在も1/2 kgとして生き残っている）がある。

まず、入場料が「10フラン」と仮定するとどんなものか？ 当時の物価としては、小麦の価格が、1789年の革命前後で、1 quintal (100 kg) あたり20フランから28.5フランに高騰したという記録がある。約2年間に50%のインフレがあつては、人々は暮らせなくなる。台所をあずかるパリジェンヌたちが怒って、「パンをよこせ！」と言ってチュルリーに押しかけた。すると、その群衆を眺めていたマリー・アンターネットが、「あの人たちは何を怒っているの？」とたずねた。お付きの（女官であろう）が、「パンがないから、パンをよこせと言っているのですございます」と説明した。すると、「パンがないなら、オカシを食べれば良いのに！」と言ったという「ワライ話」がよく紹介される。実は、これが「できすぎた笑い話」で、本当にオカシ意味がほとんど伝わっていない；

フランス料理の極め付けの“dessert”（デセールと発音して下さい）には、ガトー（菓子）またはフロマージュ（チーズ）の選択がある。「菓子」の方は、「オナカは一杯なのであるが、空腹感だけが、まだなんとなく残っている」場合を選ぶ。生理学的にいえば、「甘いお菓子を（少し）食べて、血液中の糖濃度を急速に上げ、それによって満腹感ができる」ということになる。こ

れに対してチーズを選択するのは、「まだ（量が）本当に食い足りない」という意思表示になる。なぜならば、チーズはパンに付けて食べることができるので、パンと一緒に出される。それで、ムシャムシャとパンを食べて、文字通りの「お腹一杯」ができあがる（あまり上品なやりかたではない）。それで家庭料理の招待では、まず「フロマージュ？（チーズ）」と訊ねてくるのが普通である。皆が、次々に「ノン・ノン……」と返事をしてきたところに、一人「ウイ」と言われると、皆「ウヒー」という表情をする（かと言って遠慮する必要はない）。なぜならば、その人の「パンとチーズ」が終わらなければ、次のガト（お菓子）が出てこないからである。この待たされる間の会話を、何も食わずに、何とかつなげなければならない。ほんの時たまに来る、日本の来客は、何でもノンと言っては悪いと思っているので、一人でチーズを食べる。他の人たちが待っているとも知らずに、このチーズは何ですかなどと話しながら、なかなか終わらない。また、「日本のフランス料理」では、いやおうなしにチーズとケーキを食わす。こんなもんでしょうナアと言うほかはない。

マリー・アンターネットの笑い話は、庶民がフルコースの料理を食べたあとで、デセールに「チーズとパンが食べられない」と言って怒っている、と思ったという庶民感覚とのズレに（どうせ作り話だが）オカシサがある。

ところで、小麦100 kg（1 quintal）が30フランとすると、サロン演奏会の一晩の料金が10フランは高すぎないか、という疑問が残る。コメの値段は100 kgで15万円くらいだから、コメと小麦を同値と仮定すれば、10フランは5万円の入場料ということになる。

サロン・プレイエールのチケットを買ってくれた人を20人とすれば、プレイエールには200フラン入る。仮に50%を出演者に払うとすると100フランになる。当夜の出演者を20名とすると、一人当たり5フラン、つまり約

2.5万円くらいを受け取ったという勘定になろう。パリの屋根裏部屋の部屋代を月4,000円とすれば、これは約6カ月分の部屋代となる。この計算は、当たらずと言えども遠からずではあるまいか？　つまりショパンは、ほぼ6カ月に一度はサロン演奏会を引き受けて、部屋代を稼がなければならなかった。生活費の方は、ピアノのレッスンを引き受けて稼ぐ、という生活になる。楽ではない。

プレイエールはこのように、サロンを開いてチャッカリと稼ぎながら、財産を増やし、ついでにプレイエール社製のピアノを売り込んで儲ける。これは典型的な「ブルジョワジー（有産階級）」のサロンである。純然たる貴族の夜会は会費など取らない。それで経済的には、青息吐息である。【たとえば、トルストイの『戦争と平和』を御覧下さい】

貴族階級が、先祖から何代もかけて（経済的既得権の上に）築き上げて来たものを、「貴族趣味」という。貴族趣味という、わが国では、洗練されたもののように思う人が多いらしいが、実態はひどく俗悪・悪趣味である（疑う人は、ルーブル・ベルサイユ宮殿を見たらいいでしょう）。その貴族趣味をまねて、短時間のうちに、金の力をかりて、自分の身の周りに再現しようとするものを、「ブルジョワ（成金）趣味」といって、低俗・俗悪の代表のようにいう。しかしこれは、彼等が手本にする貴族趣味自体が、もともと俗悪・悪趣味であるのだから仕方がない。さらにそれをまねる、プチ・ブルジョワジーのプチブル趣味、さらにさらに、プチ・プチ・ブルジョワ趣味などと、低俗化には果てしがたい。

やがてショパンは、貴族・有産階級の子を相手にピアノのレッスンをする、割りのいい仕事についた（という）。それで、経済的には随分豊かな暮らしができるようになった（という）。しかし彼には、「フランス階層社会」のもつ恐ろしいワナが、そこで口を開けて待っていることが（おそらく一生）

分からなかったのである。

「フランス階層社会のワナ」とは、Snobisme（俗物紳士・気取り屋・成り上がり）に対する、果てしのない嫌悪と排斥である。分かりやすく言えば、「貴族でもないのに、貴族の仲間入りをしようとして、貴族に取り入る。自分より少しでも身分の低いものは軽蔑し、それらの人たちには絶対に近付かない者」をいう。アメリカでは、この種の人間は、“Social Climber”と呼ばれ、やはり軽蔑される。アメリカでは「ホーム・パーティーに呼ばれるかどうか」がかなり重要なランクづけになる。それで、少しでも自分より上の人には取り入り、彼のパーティーに出るために、八方手を尽くす。一方、少しでも社会的ランクの下な人との交際は一切避ける。こういう態度を隠そうとしない、などである。『物理学者・研究者の世界でも同様の人物が溢れている』

ショパンのサロン・プレイエールでのデビューは、失敗だった、と言ってもよいであろう。それはたぶん、音楽が「古臭かったから」である。続くサル・プレイエールでの「大衆化の波」にも乗り損ねた。それを彼自身は、「大勢の前で演奏するのは、好きでないから」と表現した。しかし、「パリ上流社会」の「サロン演奏会」では、成功を納めていったらしい。収入のよい「ピアノ家庭教師」の仕事にありつき、「召使と馬車」まで持つようになったという。

馬車は当時のステータス・シンボルで、通常は「軍人・貴族」だけのものである。「近代市民社会」が発生し、革命的に進展しているパリには、「金さえ出せば誰でも乗せてくれる辻馬車」もすでにあったかもしれない。当時すでに、ブルジョワジーが専用の馬車を持っていたかどうか、調べたことがないので、何とも言えない。当時、自分で馬車を持つことは、今日の自家用車よりも社会的制約が大きい。パリには、relais（ルレ；リレー）という名の付

く地名がたくさんある。これは馬を取り替えるところである。いわば、現在のガソリンスタンドである。「東名高速をトヨタで降りても、ニッサン車にはガソリンを売ってくれないゾ」という冗談があった。同様に、もしルレで「替え馬がない」と言われたら終わりである。馬は、思ったよりも持久力がないからである。

したがって、ショパンが「一人の召使と、馬車を持つような生活」をしていた、というイミは複雑・重要である。ショパンは「経済的に豊かになった」。だがそれは「結果」である。結果には原因がある。その「原因」は、彼が上流貴族の「カコイ者」になったからである。「貴族でもないものが馬車をもっている」ことが、その証拠である。ショパンは、自分がこの「得意の絶頂」にある時、危険なスノビズムのアリ地獄の穴の中に、ゆっくりと滑り込んでいる自分の姿に、少しも気がついていなかったに違いない。

ショパンが、ポワソニエールの屋根裏部屋に住み、ルレから馬車に乗って出かけていると思ったら、とんでもない勘違いである。馬と馬車は「馬小屋」に入れ、召使は「別棟」に住ませる。ショパンに、そんな経済力のないのは明らかである。つまり、彼自身も「馬小屋のある館に住み込んでいる」のである。「上流社会の貴族の館の、別棟に住み込んで、馬車まで借りているピアノ家庭教師」。これが当時のショパンの姿である。

ショパンのパリは18年しかない。彼の毎日を、1時間ずつ記述することだってできそうに思える。【「作曲の跡づけ」だけでは、音楽史は書けまい？】ショパンは「馬車に乗って」、沢山の（階層の）サロンに出かけていったに違いない。パガニーニ、メンデルスゾーン、リストなどと交友があった。1836年には恋が生まれ、翌年プロポーズし、1年待った返事はノンであった。哀れ、彼のスノビズムは僅か7年で終わったのである。

『「物理学史」とは、(物理学の) 学問の展開を跡付けるのがソノ仕事である』  
 と言ったアホな大学教授がいた。読者の皆さんは、すでに何度も聞かされてきた：「歴史的事実」と「歴史」は混同できない・「歴史」は史観の産物である・(「客観的歴史」などというものは、存在しない) などなど、と、……したがって、ショパンの生活が理解できなければ、その作品の精神も理解できず、したがって、ショパンの音楽史など書けるわけがない、という主張も理解していただけるであろう。

ショパンは「貴族でもないのに」馬車に乗っていた。おかげで行動範囲が広がった。パリのほとんどの地区が、彼の活動範囲となった。しかしショパンは、その「フランス階層社会」の中に、彼を待ち受けている「危険な第二のワナ」があろうとは、気が付いていなかったに違いない。それは、「パリは、居住地区により住んでいる階層が違う」という、単純な「歴史的事実」である。いや、そんなことは知っていたかもしれない。それでもなお「彼の馬車」が、いろいろな階層のサロンへ彼を運び込んでゆくのを、自分でも制御することができなかったのもであろう(演奏を頼まれれば嫌な気はしない。その上に、ショパンは、もともとサロンが好きであったようだ)。

かくして、ショパン自身も気が付かぬうちに、「上流貴族だけのサロン」・「上流貴族と上流ブルジョワジーのサロン」・「中流貴族と中流ブルジョワジーのサロン」などを経て、「成り上がり貴族と不満ブルジョワジー(革新派)のサロン」に至るまで、彼の際限範囲は広まっていた(に違いない)。だが、彼がそれほど「有名になった」にもかかわらず、「フランス貴族の女の子」は、彼にとっては「高嶺の花」であった。貴族出身でない外国人音楽家(演奏家)の社会的地位など、フランスでは低いのである。「天才少年モーツァルト」がクラビコード演奏でデビューしている絵を見ても、ほとんどの貴族は演奏を聞いていない。大部分はシャベったり、あるいは食事をしている。学生が勝手にシャベッテいる教室で、一人でつまらない講義をしている大学



教授の姿に似ている。かくて、ショパンが夢中になれた相手も、昔の「教え子」のポーランド貴族の娘であった。

貴族にとって、音楽家のプロポーズを断わる理由などいくらでもつくれる。現代の「音楽史」作家たちは、ショパンの健康（すでに肺結核の兆候があった）とか、身分の違いとか、20歳という若い女性の判断力の弱さ、などをあげている。そして「娘が母親に説得されて断わった」という。ここで音楽史家のいう「身分の違い・母親の説得」とは、何のことであったのだろうか？ 実は、「音楽史家」には何も分かっていないらしい。母親が決して口にしなかったであろう「本当の理由」とは、「彼は、貴族でもないのに馬車を乗り回して得意になっている、スノップである」という「悪い噂」であった（はずである）。【現在なら、スポーツタイプのオープンカーを乗り回しているドラ息子と言えはお分かりいただけよう】

ショパンの音楽が素晴らしいからといって、人間も素晴らしいとは限らない。彼はサロンという居心地のよいソーシャル・ワークに入り浸り、自分が「ワルシャワ出身」の田舎者【プログラムには、“de Varsovie”（deは出身をイミする）とあった】と見られていることを忘れていた。しかも他方では、「彼は中流貴族のサロンにも出かけている」という情報が、「上流貴族社会」にも伝わっていたに違いない。彼等は、いつだって簡単に、「ピアノの家庭教師」など断われるのである。何も知らぬショパンは、そんな華やかなある日、サロンで「革新的女流作家」として有名なジョルジュ・ソンドに紹介された。

ショパンの感じた第一印象は非常に悪かった。ズボンを履いている、「革新派の不满分子」のチャンピオンのような女流作家を見て、「アレでも女だろうか？」と友人宛ての手紙に書いた。だが間もなく、ジョルジュ・ソンドは女であることが分かる日が来た。それ以後、ショパンは二度とそのような

ことを言わなくなった。

ジョルジュ・ソンドのことを絶世の悪女に仕立てあげ、ショパンを清純な楽聖に収めたがる人は多いようだ。何という浅薄な人生観かと呆れ返るばかりだ。あるいはショパンを、まるで祖国ポーランドの秘密革命組織の一員であるかのごとくにほめかすなど、呆れるばかりの虚構にもこと欠かない。また一方では、まるでナヨナヨとした「竹下夢二の美人画」のごときショパンが演奏される。それも「毛むくじゃらの太い腕」をした男が、ナヨナヨと弾いて聞かせるという、オゾマシイ・ショパンがマカリ通る。さらに、あろうことか、ショパンの曲は「退廃的」だから、子どもが聞くと「不良になる」と本気で信じているので、「ウチの子には絶対に聞かせません」というママ・パパなど！ これらのデタラメを一言でヒッククレバ、「フランスというものが、何も分かっていないから、こんなことになるのだ！」と言うほかはあるまい。どこから話を始めてもよいが、本筋の「ショパンとジョルジュ・ソンドのばあい」から始めるのが、分かりやすいであろう。

ショパンとジョルジュ・ソンドの「出会い」は（最も典型的な言い方をすれば）、「タカラヅカの男装の麗人と、カブキの若い美人女形との組み合わせ」であると言えば、一番手っ取り早い。

しかしこれでは、二人の関係の「精神的な要素」がまるで分らない。それで、少し回りくどいが、「同性愛的・異性愛」を主軸にした愛情であるとつけ加えればよからう。フランス芸術界が、半ば公然とこれまで認めてきた「きめ細かく・感性の鋭い・秘めやかな同性愛的愛情」による「異性愛」である。この、二重三重にヒネツタ「複雑至極な精神構造」が、二人を引きつけていた（に違いない）。この「キーワード」を理解できない人が、「ショパンには謎が多い」という。だが、いったん分かれば簡単なことである。

ショパンを清純な楽聖に仕立て上げたい人は、彼がポーランド貴族の娘との恋に破れ、ガックリ落ち込んでいたところを、ジョルジュ・ソンドに「つけ込まれた」と言いたいらしい。有名人にはなりたくないもので、ショパンがジョルジュ・ソンドとのラブ・アフェアを書いた、友人宛ての手紙というのが翻訳されている。ショパンはまだ27歳で、文章の表現力も整っていないところにもってきて、自分とジョルジュ・ソンドとのラブ・アフェアの主題が「エキゾチック・ラブ」にあることの自覚がない。その上に、日本の翻訳者が月並みな言い方しかできないときているので、全く観賞に耐えない手紙と読める。だが、ここで筆者が展開したい話題は、そんなコマゴマした「各論」についてではない。

ショパンは、「馬車付きの、上流貴族のカコイ者」の地位を失っても、「では自力更生を計ろう」と立ち上がるような、精神力の強い人間ではなかった。それは彼の欠点でも弱点でもない。彼の人生には、そのような「強さ」を必要としなかったのである。平たく・分かりやすく言えば、「ショパンほどの才能を持ち、(十人並み以上の)容貌に恵まれた上に、(おそらく)オドオドと(見ようによっては)エレガントであると感じさせるような立ち居・振る舞いをする、可愛ラシイ男ノ子」が生きていくには、「強さ」は必要ではないのである。このような「男の子」が「困っている」と、それを「イイ気味ダ」と思う人間と同じ数だけ、「見チャいられない」と思う人間が現れる。彼等は「私利私欲を離れた援助の手」を「男の子」に差し延べる。それが彼等のヨロコビなのである。

分からない人には別の例を示そう。今の天皇が幼少の頃、学習院小学部(と言ったと思うが)に入る年齢となった(なられたと言うべきか)。当時、皇太子は神宮外苑の隣の青山御所に住んでおり(おられと言うべきか)、学習院は四谷の迎賓館の隣にある。実は、青山御所の表門と裏門は坂の上下にあり、裏門から学習院までの距離はわずか500 mほどしかない。皇太子はここを通

って通学するのである（もちろん車でであろう）。しかし、多くの人がこのことを知っており、通学路に並んで、朝のお出ましを待っている。彼等は、皇太子が通ると一斉に手を振った。だが、のちに皇太子自身が述べていたのは（述べられたと言うべきか）、「自分を見ると、皆がウレシソウに手を振るのが、なぜなのか分からなかった」とある。「彼らのヨロコビ」は分かっていただけであろう。対象が「可愛ラシイ男ノ子」であるだけではない。「彼等の感じる一体感」が「彼らのヨロコビ」なのである。

ジョルジュ・ソンドが、ショパンに「手を出した」動機は、性的なものだけではない。「見チャいられない」ショパンを助け、その才能を「自分のものとする一体感」である。ここにさらに「同性愛的愛情」が加わった。これが分からぬ人が「ショパンには謎が多い」と言い、彼女の同性愛を漠然と感じる人が（どうせ彼等には、バクゼンとしか分からないのだが）ソンドを「フケツな悪女」と言って、徹底的にオトシメルのである。

同性愛的愛情というのは、（この年になれば）見ていて仲々面白く、また微笑ましい。必ず同じ時間の電車に乗り、隣り合って座る女子学生二人。やお互いに「ラブレター」を取り出し交換する。「想う相手が隣にいるのに」話かけもせずに、黙々とラブレターに読みふける。

いつも隣り合って座り、面白くもない話をジッと押し黙って聞き、オシャベリもしない静かな男子学生二人。やがてある日、彼等の手首には同じ色の時計バンドが巻かれているのを見る。これは、お姉さんゴッコ・お兄さんゴッコではない。ましてや、明治政府高官どもが持ち込んできた「よかちご」趣味でもない。はたまた、お殿様がハベラセた刀持ちの「男色」趣味でもない。おそらく、動物界には存在しない愛情の一つである。それは、分担と責任を果たす「スガスガしさ」に支えられるチーム・ワークとも異なる。また、同じ釜の飯を食って、同じ戦場で生死を共にした泥だらけの戦友愛とも違う。

同性愛的愛情の「現象論的特徴」の一つは、必ず一方が保護者となることである（たぶん愛情の強い方がなる）。しかも（これが重要であるが）、他方には被保護者の意識が全くない。皆が自分に向かって、喜んで手を振るのはなぜかと考え込んだら、無邪気は終わる。「こんなにしてくれるのはなぜだろう？」「こんなにしてもらっては悪い」と考えたら終わりである。同性愛的愛情には、報いるものなど何もないのである。

ショパンはジョルジュ・ソンドの保護を、保護と感ずることすらなく、外界の攻撃に構える殻のない、「貝のムキ身のような」年月を過ごした。どこの誰がどんなに悔しがろうと、ジョルジュ・ソンドと過ごした9年間だけが、ショパンの才能の素晴らしさを、余すところなく引き出したのである。ではショパンはなぜそのように無防備であり得たのだろうか？ それは（おそらく）自分の命がもはや長くないことを知っていたからであろう。もはや、パリ前半7年間のスノブの生活に戻るためには、自分に残された時間も、エネルギーも十分ではないという自覚があったからに違いない。一言でいえば、ショパンにも、フランス階層社会の持つ「厚みと重み」が、十分すぎるほどに分かってしまったのである。

こういう類いの人間には「挫折・あせり・完成・未完成」などという概念がない。何かを仕遂げたとか、仕遂げねばならないとか、という感覚すらない。なぜなら「仕遂げた」とは「努力」によって得られる報酬であって、「天才と努力とは完全に無縁」だからである。ショパンは天才だったのか？ そうでしょう！ シューマンが「帽子を脱ぎなさい」と言ったではなかったですか？ ショパンは、いつまでも自分の作品に手を入れていたので「完成年度が決められない」と言ったのは誰ですか？（音楽史家さん、アンタでしょう。）もうよく分かったでしょう！ ショパンはいつだって「ミスタッチ」をしたのです。さらに一言、「果たしてショパンは、【ショパン・コンクール】で入賞できるのでしょうか？」と言っておきましょう。

パリ南西300 kmのところにノアーン (Nohan) という田舎町がある。ここに、成り上がり貴族の不満分子・ジョルジュ・ソンドが祖父からもらった「別荘」がある。300 kmというのは馬車で一日で行くにはやや遠い。それで、中継の定宿があったはずだと思うのだが、ついぞその話にお目にかかったことがない。ソンドは、冬はパリ、夏はノアーンという暮らしをしていたという（要するにヴァコンスである）。ここノアーンでの「野外サロン」のカリカチュアがある。時代が進んでブルジョワジー文化が完成してくると、野外でも女性がヌードで転がる（それは、彼等の手本の貴族文化がそうだったからであるが、今は先を急ぐ）。

このカリカチュアの中心にジョルジュ・ソンドがいる。帽子をかぶりドレスを着ている。「サンドは頭がショパンになっている鳥をもっている」と日本語の説明文がある。アキレタことに、この「頭はドラクロワ」である（ショパンにはヒゲがない。もうどうしようもないと言うほかはない）。これは「ショパンはソンドのペット」という先入観があるから、こんなことを平気で書くのである。実は、このカリカチュアのどこにも、ショパンらしきものは描かれてない。それはそのハズである。ショパンはいつも一人で、2階にくすぶっている。ソンドにとってショパンは、見セビラカスものではないのである。彼等の関係は「きめ細かく・感性の鋭い・秘めやかな同性愛的愛情」によって続いているのであって、このようなドンチャン騒ぎとは異質・無縁のものである（ことがこれでも分かる）。

一日のバカ騒ぎが終わるとソンドが2階に上がってくる。「何かできた？」と聞かなければ、「これができた！ 聞いてくれ！」と言うようなショパンではないのである。ソンドは、今日のわれわれが、疲れた一日の終わりにCDを聞くように、ショパンのライブを独り占めにしていたのである。

「他の音楽家は人に聞かせるために作曲した。バッハだけは【神に聞かせるために作曲した】。われわれは、それを【横で、ツイデニ聞かせてもらっているのだ】」と言うのがヨーロッパの【常識である】と聞いた。ついでに（これも常識であると思うが）「作家には、自分の作品を読ませたい特定の人がある」とも聞いた。だとすれば、「音楽家にも、自分の作曲を聞かせたい特定の人がある」ということになるだろう。では、ショパンにとって、それは誰だったか？ サロンの騒ぎが終わると、2階に上がってくるジョルジュ・ソンドの他に、誰もいないではないか！ ソンドのことだ。ポーランド農民の服装をまねた「男装」をして、長靴をはいて、見よう見まねでマズルカのステップを踏んで、「ショパンを楽しませなかった」と、誰が言い切れるだろう？ おっしゃる通り、マズルカは「祖国に対する望郷の思いと愛情」を込めてつくられたであろう。だが、ショパンはバッハではない。天空のかなたのポーランドに向かって、曲を捧げたりはしなかったであろう。

ノアーンにおける、ジョルジュ・ソンドの「野外サロン」をからかったカリカチュアでは、中心にいるソンドは「ドラクロワの顔をしたオウム」を手を持っている。ドラクロワは、この小論の最初に述べた通り、今日のフランスが「超・国宝級の取り扱い」をしている、「三色旗を持ったフランス女」を描いた画家である。だとすると、ここに集まっている連中は、「非常にラディカルな革命的議論はするが、実際行動は何もしない」、典型的なプチ・ブルジョワジーであると言えよう。しかし一説によれば、かの『三銃士』で有名なデューマは、勇敢に二月革命に参加して街頭でも戦ったという。そして「奇跡の三日間」が終わって帰ってくると、ドラクロワに向かって、「君はバリケードにはいなかったけれど、ボクの友情は変わらないよ」と言った（という。泣カセルね）。

ジョルジュ・ソンドに向かって、ひざまずいて「求愛している」のは、フランツ・リストである。リストは仲々「可愛ラシイ男ノ子」で、すでに

1834年（リスト23歳、ショパン24歳の時）以来、マリー・ダグー伯爵夫人の愛人になっていた。ダグー伯爵夫人のサロンには、サンジェルマンの貴族たちが溢れていたという。1834年には、ショパンの生活もようやく景気がよくなってきていた。華やかな演奏をするリストは、6歳の時から「天才ピアノ少年」の名をほしいままにしてきたが、自分の演奏曲目には、いつもショパンの曲を一曲加えていたという。こうして、ショパンの名はリストによって広められていった。

リストには意識した華やかさがある。1835年には、ダグー伯爵夫人がスベテを捨ててリストとスイスに駆け落ちをする（パリ生活3年目にすぎなかったショパンは、さぞや驚いたであろう）。フランスに戻れないリストは、スイス、イタリアを中心に演奏と作曲に励み、ますます有名になる。3人の子どもが生れた。だが1844年に、10年間のコアビタシオン（cohabitation；共棲）は終わった。そして1847年に、ドイツ・ワイマールにリストが現れた時には、カロリーヌ・ヴィットゲンシュタイン（ポーランド）公爵夫人がつき添っていた。ワイマールでは世界的ピアニストとして、数々の栄誉と勲章を貰った。彼の交友リストには、ベルリオーズ、ワグナー、ムソルグスキー、ボロディン、バラキレフ、サンサーンスなど、目も眩むような名前が続く。そんな彼が、自分の演奏会では必ずショパンを一曲弾いた。リストはハンガリー貴族の出身であったにもかかわらず、「貴族階級と音楽家」では教会の結婚許可が出なかった。リストは晩年になり僧院での隠遁生活を選んだ。これまでの人生とは全く対照的な生活である。そこでも「僧会員職」を与えられ、ほとんどをバチカンで過ごすことになった。この間、なお作曲活動が続き、最後の「交響詩」を完成した。とうとう、巡礼活動途中のバイロイトで病死する。75歳であった。しかも、リストの亡くなった翌年、1887年3月、カロリーヌ・ド・ザイン・ヴィットゲンシュタイン公爵夫人が、床の中で冷たくなっているのが発見された。ショパンは生涯に30回しか演奏会を開かなかった。そんな必要のないことは、ショパンとリストにはよく分かっていたのである。



## § Fromage (チーズ)

ショパンのパリ生活18年の前半の、ことに1832年は、コレラの流行が激しかった年である。パリ（あるいはフランス全土）の衛生観念の低い伝統は、現在まで続いている。有名なパリの下水道と水洗トイレの事業は、1894年にならないと終わらない。コレラはペストとは違うので、飲み物・食べ物に気を配ればいいはずである。しかし空中を飛んでくる蠅や細菌のルートがある。このため、ルイ・パスツールでさえもが、数々のミスをした。このような「コレラの恐怖」の中に、ニコロ・パガニーニがやってきた。彼は1828年のウィーン演奏会以来、有名になり、街には「パガニーニ・スタイル」という服が流行った。リストはパガニーニにショックを受けたという。もちろんショパンも聞いていたであろう。

ショパンのパリ18年の後半は、パリの政情不安な時期である。詳しく調べたわけではないが、ジョルジュ・ソンドがノアーンに引き込もる年は、ソンドにとって、パリにいるのが危険であった年ではないかと思われる。なぜなら、毎年ノアーンに行くわけではない。また、ヴァコーンスという習慣が、フランスに定着していた時代でもない。では「ノアーンに行く・行かない」を決めた要素は何か？ もちろん「文筆・著作のため」ということもあり得よう。だが、多少とも「フランス人の生活形態」を見聞してしまうと、彼等の「行動を決定するファクター」としては、「勉強のため」などというのは、「最後の・最後の・ファクター」としか思えない。

フランス人が朝起きるとまず考えることは、「今日のランチは、どこで・誰と・何を食べるか？」ただそれだけである：

「ランチ」は一日で最も重要な食事である。朝食はパン・カフェオレ・ジ

ユースなどで、プチ・デジュネ（ちいさな昼飯）という名前の通り簡単である。ただし、ルイ王朝時代の女性たちは「宵ッ張りのアサ寝坊」だったので、寝室に食事を運ばせて、自分はベッドに上半身を起こしただけの、ガラシノナイ食事をした。ブルジョワジーの女性たちも、「ああいう食事がしたい」とかねがね願望していた。それで、このスタイルが社会に定着した。それで、パリの中流以上のホテルでは、メイドが朝食を部屋に持ってくる。もちろん「朝食は何時がよいか」と前の晩に聞いてくる。しかし事情の分からぬツーリストが、いい加減に返事をすると、とんでもない早朝にメイドに起こされる。

「Dejeuner：デジュネ（ランチ）」には2時間（12：00-14：00）をかける。レストラン・自宅へと皆が急ぐ。一日4回あるラッシュの第2回目が始まる。交通巡査もレストラン前に二重駐車をして、お食事。フランス全土の行政活動は2時間完全にストップする。

彼等がランチを重視するのは、もちろん「ウマイモノが食べたい」からである。フランス人は、イギリスの食事を「Phenomenologique, フェノメノロジック：現象論的食事」であるとクサす。そのココロは「見たところ、ウマソウナ物が並んでいるが、食べてみるとまるでダメ」ということである。では、彼等のいう「ウマイ」とは何か？ それは結論だけ言えば、「ソース、つまりタレがウマイ」というだけのことである。ではその「ソースの原料は」といえば、卵・ミルククリーム・胡椒（など）・砂糖・バター・オリーブオイル（実に多種である）・肉汁（魚はクサくて、日本人にはとてもダメ）などで、とくに秘密はない。卵は必ず白身と黄身を分けて、電気ミキサーで十分に泡立ててから混ぜる。ただスパイスとオリーブオイルの引き出しには、見事なほどたくさんさんのビンが並んでいる。それで「郵便局のあのマダムはコチコチだ」とか、「マダム・パトウ（毎週1回来る掃除のオバチャン）の二の腕は、オマエのモモより太い」とかベチャベチャ話しながら、どんどんとつくって

く、料理の心得のある人は言うかもしれない、「それはただマヨネーズをつくっているだけだ」と。そうかも知れない。しかし帰国後、あれも・これもとスーパーのマヨネーズを買い集め、われなりに調合して、ゆでたホワイト・アスパラにあわせてみたけれど、コノ味だったと納得できるものはなかった。

ダメと言われる、イギリス料理の名誉のために付け加えておくと、フランス人の主張は、「ソースのダメなものは、全て失格」というだけのロンリなのである。「イギリスのソースなど、残しても誰も惜しいとは思わない。ところがイギリスのシェフは、いつも残されるのは、自分の味がマズイからだと悟らずに、出しすぎるからだと思った。それでビンに入れてテーブルに出せば【必要なだけ使うから残さない】と思って、ビン詰めソースを発明したのサ」と言うのである。日本に帰り、スーパーの棚に並んでいる沢山のソース・ビンを見るたびに、ついクスクスと思い出し笑いがでる。

フランス人のランチの楽しみは、2時間のオシャベリにある。大学のスタッフは、13:00-16:00と、実に連続3時間・毎日シャベリ込む（だから昼食は重要です）。フランス滞在・1カ月後には、完全にこのペースにハマリ込む。毎日のこの時間が「実に楽しいと痛感する」ようになる。それに比べると、アメリカ人の1時間の昼食時間はもの足りない。ましてや日本人の15分ソコソコの昼飯など、イヌ・ネコ同然の食事としか思えない。

オシャベリのテーマは何か？　これが重要である。フランス人は「女の話」しかしないと（アメリカ人は）思っている。確かに「異性に関心がなく、また異性から関心を持たれない人」とは「つきあう必要はない」くらいに思っている。だが、二番目に重要なテーマが「政治の話」である。それは結局、いい異性に巡り合えて（共棲し）、しかも、いい政治がおこなわれている時に限り、「ウマイ物が食える」からである。

ショパンとジョルジュ・ソンドの別れは、ソンド・娘・ショパンの三角関係によるという説がある。全く「低俗で現実離れのした」話である。ショパンには、そんな「ツヤ」はない。また「ショパンはソンドの家庭のトラブルに巻き込まれた」という説もある。ショパンとソンドの息子の間に、確執があったという。ショパンは、そんな人と争えるような強い人間ではない。ソンドの家庭が崩壊し、彼の居場所がなくなっただけである。

ショパンとソンドの二人を引きつけていたエキゾチックな「同性愛的・異性愛」の本質が、全く分かっていないから、そのような俗なことを言うのである。ショパンはすでに37歳になった。27歳の「可愛イ男ノ子」にもトウが立っている。もはや、綺麗でも可愛いくもない。それを見て、ジョルジュ・ソンドは単純に飽きたのである。男の37歳とは、青年から中年にかかるムツカシイ時期である。少年から青年になる時よりも大きな、「容姿の変化」に直面する。資本主義経済が確立した現代社会では、男性の多くは、この時期を夢中で過ごしてしまう。自分の「寄る年波・容姿の衰え」などに気を使っている暇はない。ワイシャツの袖をまくりあげ、仕事に追われて日を送る。女はそれを、「ハタで見えていても美しい」などと感じる。だがショパンは、そんなモーレッツ人間ではなかった。

ジョルジュ・ソンドと彼女の子どものたちの間のトラブルの原因は、「政治問題」であつたろうと考えられる。なぜなら、すでに述べた通り、「フランス人と政治問題」とは切り離せないからである。事実、1848年には二月革命が起きた。ソンド一家のトラブルも1845年頃から表面化している。まさに1848年の二月革命が潜行して来るペースと、一致しすぎているではないか。当時フランス全土には、深刻な不況と農業の不作が進行していた。フランス貴族にとっては、まさに「住みにくい、危険なシーズン」が近づいていたのである。


「フランスの政治」に関わるのは、命懸けの仕事である。ひとたび革命が起れば、貴族でも簡単に殺されてしまう。化学者として有名なラボワジェも、「徴税請負人」というルイ王朝の手先を勤めていたばかりに、簡単にギロチンにかけられている。一体、ジョルジュ・ソンドはどちらにつくのか？ 革命側か、反革命側か？ これは全く命懸けの選択肢である。子どもたちは革命党側で、ソンドが反革命側か？ それも全く分からない。ジョルジュ・ソンドの「家庭内の対立」の原点はここにあり、「結婚問題・居候のシヨパン・娘の浮気」などは、互いになすり付け合っている、派生的なイイガカリであったのだろう。

シヨパンは1847年夏には、すでにノアーンにはいなかったと思われる。彼はおそらく、シヨン・ドマール（Champ de Mars；現在、エッフェル塔のある広場）対岸の、シャイヨー（Chaillot；現在は宮殿がある）付近の友人のところにいたのであろう。そこには現在、Place de Valsovie（ワルシャワ広場）という名の広場がある。

## § Gateau（ガト；ケーキ）

“Mesdemoiselles, Mesdames et Messieurs, Nous arrivons a Nancy！（ノンシーです）”という車掌のアナウンスが入る。近くの座席で、フランス人が「ノンシーだ」とつぶやく。【誰だ？ フランスの汽車は全然アナウンスしないなんて言った奴は！ ストラスブールを出る時だって、車掌はチャント笛を吹いた！ もっとも「ピーッ」とタッター一回だけだったけれど！】。窓の外を見ると、人気のない田舎町が、レールのすぐ側の道に沿って並んでいる。アメリカ人のいう“Sleepy Town！（眠気のでる、退屈な町）”である。

この町に、この通りに、この駅に、「東のヤパン人」が少なくとも3回、ナダレを打って殺到した。両親と共に、生命カラガラ逃げた少年ポアンキャ

		<b>BILLET</b>		<b>STRASBOURG</b>		<b>→ PARIS EST</b>	
A composer avant l'accès au train						<b>01 ADULTE</b>	
<b>DEPART EN BLANC</b>							
Dép 03/07 à 09H53 de STRASBOURG Arr à 13H53 à PARIS EST				Classe 2 VOIT 44: PLACE NO 23 DIASSIS MON FUM			
A UTILISER DANS LE TRAIN 104				SALLE 01COULOIR			
<b>CARTE SENIOR A PRESENTER</b>							
Dép à de <del>XXXX</del> Arr à à				Classe 0			
<b>Prix par voyageur : 182.00</b>						<b>Prix FRF 182.00</b>	
<b>SR25 PC 25 KMS03 RS 20 :</b>						<b>:DV 455548240</b>	
<b>182 215 :</b>						<b>:CA STRASBOURG 00798 14443</b>	
<b>B 874555462000</b>						<b>:500554 Dossier RANKZI</b>	
<b>08763132163122</b>						<b>Page 1/1</b>	


 <b>RAIL</b> <b>EUROPS</b>	<b>carte</b>  <b>Senior</b>									
	Valable du 14/06/1999 au 13/06/2000 Nom : FUJITA Prénom : HIIZU Né(e) le : 31/01/1933									
Cetto cartte, réservée aux personnes de 50 ans et plus, est valable en France et dans les pays de transports ferroviaires. Elle est personnelle et inaliénable. Une pièce d'identité peut être demandée lors des contrôles. Toute utilisation induite de la carte entraîne la retenue immédiate et le cas échéant l'ouverture de poursuites judiciaires. Cette carte peut être : - pour les voyageurs une réduction calculée sur l'ensemble du prix du billet, de la fonction des places inférieure à ce prix et au tarif pour tous les TGV, - pour les autres trains : une réduction calculée sur le prix de base à 50 % en période bleue et de 25 % en période blanche. Pour les voyageurs aux conditions CIV, à destination des pays du réseau RER, une réduction de 50 % d'applique sur l'ensemble du trajet sans réserve du respect des conditions ci-dessus.										
Prix de la carte <table border="1"> <tr> <td>FRF</td> <td>¥285.00</td> <td>EUR</td> <td>¥43.45</td> </tr> <tr> <td>CA</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>			FRF	¥285.00	EUR	¥43.45	CA			
FRF	¥285.00	EUR	¥43.45							
CA										
140699 15-12 S'ASSESSING EK FRF363341145 500560CA Dossier : OLLKTN										

Fig. 22 フランスの汽車の切符と高齢者・割引証明書

レーは、プロシア軍が「略奪できるものはもちろん、『略奪する価値のないものまで略奪した』のを見て以来、徹底的な愛国者になった」という。それで彼は、フランス語でしか数学の論文を書かなくなったと言われている【ただし、スペルのミスがものすごいので、いつも下書きを読まされていた友人が、ついにウンザリして逃げ出したと言われている】。略奪する価値のないものを略奪するとは、一体どういうことだろうと、いつも困惑していた。しかしフランスに来てみると、すぐに分かった。それは、やっと歩いているような老婆まで凌辱し（たぶん、股割きにでもして殺し）、死体を道に放り出して、

腐らせていった、ということである。

北はノルマンジーの海岸から、南のロワール河まで；東はライン河から、西の大西洋まで；要するにフランスの北半分に住む女性にとって、侵略者に対して体を守っていたのでは、生命が守れなかった国なのである。不思議なことに【実際に現地に行ってみれば、すぐに分かるのだろうけれど】、その地域的歴史はいつも繰り返された。「北のヤバン人」は、ロワールのオルレアンにジャンヌ・ダークが現れるまでは、ロワール以北で天下無敵であった。しかも、ジャンヌ・ダークを火あぶりにした時には、ちょうど衣服が焼け落ちた頃を見計らって「ホラただの女だったろう」と見せるために（というが、本心は分かるものか）火を下げさせたという。「ジャンヌ・ダークの裁判をやり直せ！」という声が出るのも、もっともなことだ。【アメリカでは「風と共に去りぬ」の映画の中休み時間になると、「ナマイキなヤンキーを倒せ！」という募金集めが廊下に立つ。皆、結構面白がって、チャリン・チャリンとコインが放り込まれる！】

「東のヤバン人」のナチが、「鉄のナダレを打って」、ノンシーまで1日で攻め込んで来た。彼等はノンシーに長く逗留した。だが、ポアンキャレーは百年に一人ぐらいしか現れない。交戦するはずだった「西のヤバン人」は“*Reviens, reviens ! Sans espoir ! Sans mots ! Sans amours !* (ダメダ・ダメダ・イウコトナシ！)”と言って、さっさとパリに逃げ帰った。結局彼等は、またまた、ロワール以北を明け渡した。やがて、南半分を引き受けたはずのヴィシーも、体よりも生命を守った。ついに今度は港町のMarseilles（マルセーユ）に代わって、アルプスの麓の町のGrenoble（グルノーブル）が、レジスタンスのために体も生命も失って倒れた。「フランスの栄光」は、グルノーブルとドゴールによって、辛うじて守られた（ということになっている）。

「西のヤバン人」がエレガントでシックだなんて思ったら、トンデモナ

イ！ Loire（ロワール）流域には美しいシャトー（Chateau）が多い。シャトーといっても戦うための城ではない。シャト・レジドンスといって、住むための館である。もちろん住人は貴族である。オルレアン・の南にChenonceau（シュノンソー）というシャトーがあり、日本人には特に人気があるようだ。このシャトーは（簡単に言えば）ジャンヌ・ダーク以来の対外戦争と、続く300年間のアンシャン・レジームを生き延びたシャトーである。しかも歴代の所有者が代わっても、いつも女性のものであった。そのためか、改修されるたびに美しくなったという。女性であるがゆえに后になったヒトもあり、したがってシャトーも「ロワールの王宮」にもなった。

ところがである；王様は女装をして現れ、后は男装で並ぶ。貴族は皆、黒服を着させられる。その上に、給仕は皆女の子がやらされ、しかも全裸ときている。一体この悪趣味は何だ？ たぶん彼等は、理由として「王の身の安全のため」だと言うだろう。事実、フランス女のアサシアンにはこと欠かない国柄である。こんな連中の「ロワールなまりのフランス語」がパリで大きな顔をしている。それは決して美しくない。フランス語が少しでも美しいと感じられるとすれば、それは全て「コメディ－・フロンセーズ」の舞台俳優たちの業績である。

ストラスブールに帰る汽車はいつも同じだ。パリ見物にくたびれ果てたオジサン・の隣でオバアサンがボヤキている。「クローンのことをキャロオー・ントなんて言うのよ！」

「北のヤバン人」のところに間借りしていたシャルル・ドゴールは、ついに「海の彼方のヤバン人」まで連れてパリに凱旋した。フランス語の分からない「海の彼方のヤバン人」ときたら、「人は殺してもいいが、建物を壊してはダメ」という「伝統的ルール」さえ知らないほどの「ヤバン人」だった。【貴重な文化財を守れ、などとは言ってません。死体を片付けるのは簡単で



すが、建物の瓦礫の山を整理するのは、トテモ大変だからなのです】。それで彼等ときたら、「東のヤパン人」が立て籠っていると聞けば、そこが教会だろうと、僧院だろうと、学校だろうと、ところかまわず、空からは爆弾・陸からは砲弾の雨を降らせた。おかげで彼等の通ったあとには、大変な量の石ころと瓦礫の山が残った！ しかも、生きている人間さえ見れば、男の子まで凌辱していった（と付け加える。ホントカネ？）。

というわけで、「他民族・多民族・国家であるフランス」というものが、いかなるところであるか、とてもお分かりいただけないでしょう。では最後に、「ショパンの最期」のお話をして、終わりにいたしましょう。

ショパンはハッキリと貴族の側についた。彼はリアリストだ。ピアノの作曲しかできないような「甲斐性ナシの芸術家」が食べていくためには、有産・有閑階級の庇護にすぎるほかはない。教会勢力が潰れ、王侯貴族勢力が潰れかかり、しかも銀行家はまだオンチときている時代には、多少とも「音楽の分かる」連中と行動しなければ、今夜のパンにも困る。ショパンに限らず、ベルリオーズ、カルクブレナーなど、皆二月革命に怯えて、ロンドンに逃げた。ショパンはビクトリア女王の前でピアノを弾いたという。それはそうだろう。やがては、ガレージで開いたビートルズの「ランチタイム・セッション（ランチ・タイムですぞ!）」にさえ、勲章を出すような家系の連中だ。ピアノとドラムの違いさえ分からないような先祖だったに決まっている。それでも弾いて聴かせなければ、食べていけない。その上に、気の毒に、スコットランドのファンを当てにして北に行き、いっそう血を吐く。スコットランドのファンは「ショパンを愛していた」?! デタラメを言いないナ！ 証拠を見せなさい、証拠を！

パリに戻ると「医者への勧めもあって」シャイヨーの友人の家から、ヴァンドーム広場のアパートに移された。どんな医者への勧めか？ 「葬儀屋の多い



Fig. 23 《働くのは健康に良い》  
ジャ・シッカリネ！

ヴァンドームへ」であろう。ヴァンドーム広場は、何のためのものだと思っているのだろう。ヴァンドーム広場は市民のためのものではない。チュルリーの住人のためのものである。広場は馬車をパークさせるために必要であり、馬車の行く先はマドレーヌ寺院である。ヴァンドーム広場には、今でも「死の匂い」が漂っている。ナポレオンの円柱が立ち、ダイアナが最後に泊まったホテル・リッツがある。ホテルとは、人の永く留まるところではない。つまり、ホテルが開業できたということは、もともと、人が死を待つだけのアパートがあり、そのために付

き添いの人の泊るところも必要になった、ということであろう。ヴァンドームには、やがて金持ちの銀行家が住み着き始めた。そうさ、金持ちの成金というものは、墓地の上になだって平気で住むような連中だ。彼等にはバランスシートしか関心がない。チュルリーが焼け落ちて、ヴァンドーム周辺の価値も暴落した。ブルジョワジーの集まるには絶好な場所である。

ショパンは、かくて失意のうちに亡くなった。盛大な葬儀がマドレーヌ寺院であったという。ウソだろう。当時ショパンを盛大に扱う理由など何もない。「ショパンの最期に立ち会った」という人が多すぎる、ということは彼等も認めている。ジョルジュ・ソンドは葬儀に来なかった。当然だ。彼女には【「捨てた女」のような男】を振り返る必要などなかった。「ヴァンドームからオペラ座には、真っ直ぐに歩いていける」などと言う。もうヨシナサイ！ 直線路はナポレオン三世になってから、改修したものなんだから。

FIN

## 追 記

終わりを急ぐあまり、お約束の「ドンデン返し」の話を忘れてしまった。それはこういうのである。【ショパンも彼の父親も、ロシア国籍だったのだ】とくる！ そうするとどうなるか？ それは大変なことになる。話はすべて振り出しに戻る：

ショパンの父はロシア皇帝の命令でフランスを脱出した。彼はもうフランスには戻れない。ショパンはこれを恨み、反ロシア的になり（よせばいいのに）「革命のエチュード」を作曲した。かくて、ショパンにはモスクワの刺客の手が迫っていた。ショパンはそれを知っていたので、公衆の面前に出るのを嫌っており、リサイタルでは、いつも「胸がドキドキ」した。ショパンはジュルジュ・ソンドのところに逃げ込んだ。だがロシア皇帝（ツァール）の目はごまかせない。かの有名なチャイコフスキーに対してさえ、「お前は同性愛者だ！ ギリシャ正教のタブーを犯した！」と迫って秘密の宗教裁判を開いた。絶望したチャイコフスキーは、その日のうちに、渡された毒を飲んで「急病で死ぬ」という、大変に手の込んだ「毒殺」に成功したような、連中だ。しかも、「チフス菌に感染した」と、医者さえ欺くほどの症状が出る、巧妙な毒薬を用いるような連中だ！

瀕死のショパンを、ヴァンドーム広場の「死に場所専用」のアパートに移すのに成功すると、「ポーランド亡命者社会の切っけの美女」という「ポトツカ伯爵夫人」が現れる。彼女はショパンの枕元で何やらを歌った（毒を盛ったとは言ってません、念のため）。するとショパンはその3日後、10月17日午前2時に死んだ。だが、彼女が何者であるか、何を歌ったのか、また、その場の様子を詳しく描いた絵が「ワルシャワ・ショパン協会」にあるが、誰が描いたものか、描かれている人物は誰か、イッサイ分らないという。だが、

このデルフィーヌ・ポトツカなる女性とのラブ・アフェアこそ、「はるかにショパンらしい恋愛であり、隠された深所からショパンの音楽の秘密を語ってくれる」という。

言ったでしょう：「分裂病の特徴の一つは、彼等が認知したと信じる事実の上に堂々たる体系を築き上げることである。だがその『事実』が事実を反映していない。それですべての体系が崩壊する」と。

ここに、“Polish Interpress Agency, Warsaw, Poland”なる団体の発行した写真集がある。終わりに近く、「臨終の床のフレデリック・ショパン。1849年10月17日のテオフィル・クフィャトコフスキの鉛筆と水彩によるスケッチ」がある。真横の顔であるが、「段鼻に、ガキッポイ丸く突き出たオデコ」は、まさにショパンであると信じるに足りると思える。その絵の中に書き込みがある：“F Chopin. 17. Octobre 1849. T. Kwiatkowskii”，さらに行を変えて（しかもやや濃く）“a Paris n° 65 rue de Rennes”とある。下の字はやや濃いので、誰かがあとから書き込んだ可能性もある。それで筆跡を調べることにする。“a Paris”の“a”は“Kwiatkowskii”とほとんど同じクセがある。“i”の点の打ち方も同じである。n°の“n”はやや違うが、これは“nombre”の省略だから、多少は違ってても仕方ないであろう。他に出て来る“n”“e”にも問題はないように見える。

プロの画家は、自分のサインを入れるのをためらわない。ここのサインにもタメライはない。続く、“a Paris n° 65 rue de Rennes”とはアドレスである。【パリ・レンヌ街65番にて・17日10月1849年】と読める。ではこのアドレスの意味は何か？ 画家のアトリエか？ ショパンの亡くなった部屋か？ 【プロの画家は、自画像ぐらいにしか、自分のアトリエのアドレスを描き入れることはないだろうと思いますが、皆さんのご意見は？】

では「パリ・レンヌ街65番」とはどこでしょう？

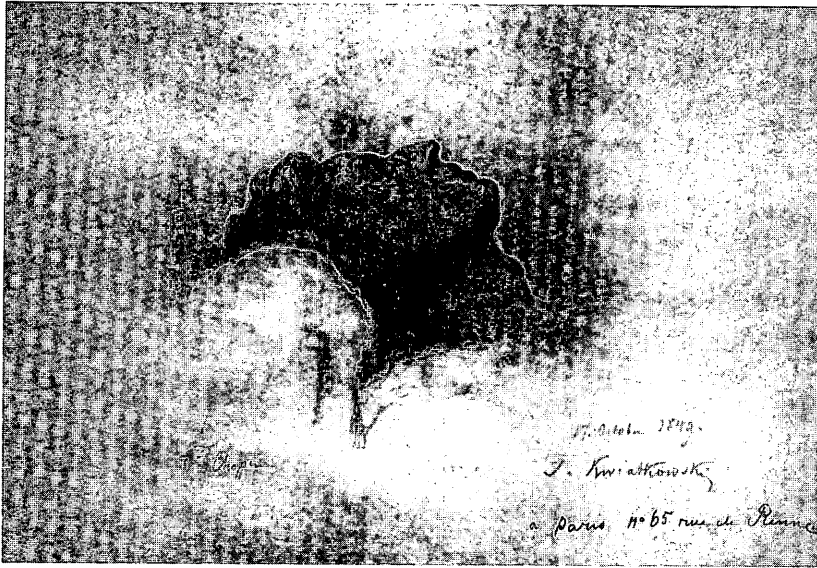


Fig. 24 1849年10月17日のテオフィル・クフィャトコフスキのスケッチ

Voila! (ソレ!) 「パリ・地下鉄案内図」を御覧あれ! 図中①は、ショパンが住んでいた「友人の家」(シャイヨー付近; 現在エッフェル塔があるション・ドマール対岸), ②はレンヌ駅(レンヌ街のほぼ中央), ③は、ショパンの墓のあるパール・ラシェーズ墓地: Cimetiere du Pere Lachaiseである。【つまり、ショパンは「セヌ左岸派」だったんですよ! 「左岸派」というのは、ルーブル・チュルリー・ヴァンドーム・ションゼリゼーなどなど、「権力の中枢」のある「セヌ右岸」に対する言葉です】

一方, ④はヴァンドーム広場, ⑤はマドレーヌ寺院, ⑥はモンマルトル墓地で, 典型的な「セヌ右岸」のスポットである(しかも, 音楽史家は「パール・ラシェーズはパリ北の地区モンマルトルに近い」なんて言っちゃって, モウ・イヤッ!)

# LE METRO

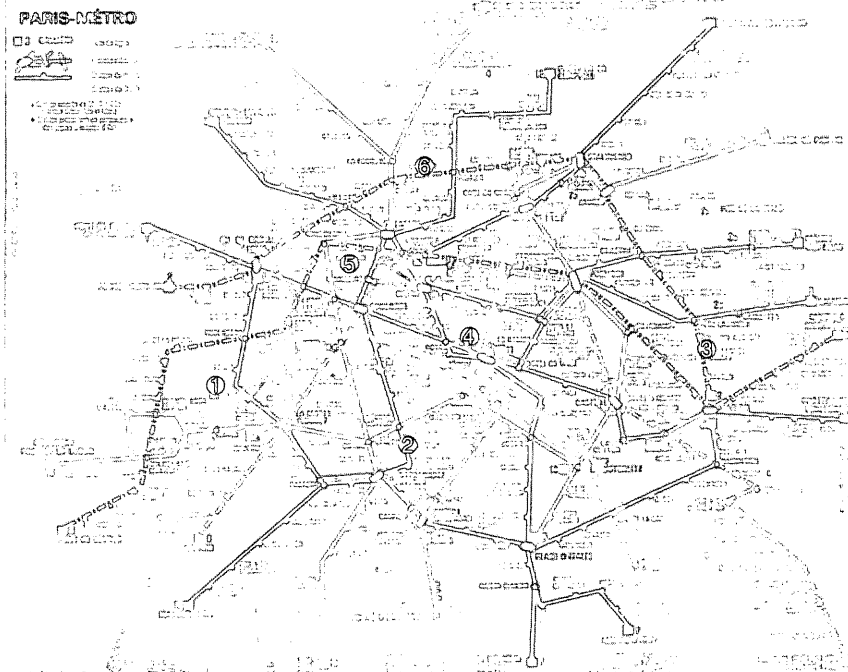


Fig. 25 パリ・地下鉄系統図

- ① ショパンの友人の家付近 (シャイヨー)
- ② レヌヌ駅 (レヌヌ街中央)
- ③ ペール・ラシェーズ墓地 (ショパンの墓がある)
- ④ ヴァンドーム広場
- ⑤ マドレーヌ寺院
- ⑥ モンマルトル墓地

皆さんは、ショパンの棺をレンヌから馬車で引いて、シテ島でセーヌを渡り、わざわざ「セーヌ右岸」のヴァンドームに移し、「近くの」マドレーヌ寺院で、ショパンの葬送行進曲とモーツアルトのレクイエムで送りながら、3,000人も集めた大葬儀があったと思いますか？ 彼等自身も「ショパンの最期を看取ったと主張する人の数はあまりに多い」と認めているのです。【あったとしても、これは第2回目の追送葬儀でしょう？ つまり、本当のショパンはモーツアルト同様、どこに葬られたのか誰も知らない、のではないのでしょうか？】

これら全ては、ショパンの人生からあのイマイマシイ悪女・ジョルジュ・ソンドの影をボヤカシ・消し去り、ショパンを純真で・可愛らしい・国民的な英雄と言われる、楽聖に仕立て上げたい「陰謀」だとは、思いませんか？ 人間の心の動きが理解できないそんなことでは、「譜面は分かっても音楽は分からない」。つまり「論文は分かっても物理は分からない」のと同じことで、ショパンが可哀そうですよ。

Merci. hf 11/23/2000 (Thu)

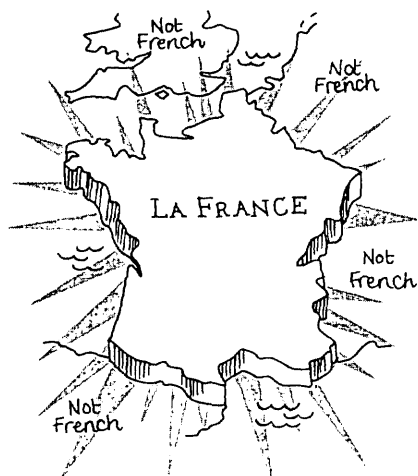


Fig. 26 フランス人の「深層心理」(Not French! Not French! Not French!)



Fig. 27 著者; Strasbourg, Alsace, France. 1999年4月30日～8月16日滞在